

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 母系社会の構造：サンゴ礁の島々の民族誌

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00008405">http://hdl.handle.net/10502/00008405</a>

第Ⅱ部  
母系社会の構造



ブッコスの人びとへ料理の分配

## 6 母系社会の構成

カロリン諸島の多くの社会には、ハイラン、アイナン、カйнаクなどとよばれる母系出自にもとづいて編成される親族集団がある。人びとはその集団に帰属することによってのみ、島社会の成員として生活することが可能になる。それらの親族集団は個々の島社会だけでなく、複数の島じまにまたがって組織され、「母系クラン」とか「母系シブ」と定義づけられている。<sup>(1)</sup> 島嶼間で母系親族集団の成員が相互に同じ集団に帰属し、クランの名前や系譜関係を認知できるのは、個々の集団がそれぞれの移住にまつわる口頭伝承をもっているからである。

これまでの研究によると、トラック島や中央カロリン諸島の社会は、階層差のない「平等社会」とみなされてきた。<sup>(2)</sup> たしかに、その指摘はパラオ、ヤップやポナペのように身分階層と称号体系が高度に発達した社会との比較のうえでは妥当である。<sup>(3)</sup> しかし、一平方キロメートルにも満たない島社会においても、社会秩序の維持や食料資源の利用といった局面で、絶対的権威をもつ人びととその指示や命令に従う人びとといった社会的、政治的地位の差異は存在する。その階層差は、一般に「酋長クラン」と「平民クラン」というかたちをとる。島社会全体がクラン間の政治的階層差によって組織されていると同時に

に、各クランも序列のあるいくつかの下位集団、リニージによって構成される。このリニージ間の序列は、クランの分節過程における本支関係と年長性の原則にもとづいて決まる。

ここでは、まず母系出自と妻方居住の方式によって構成される居住集団（家族）の性質についてあきらかにしてみた。つぎに、食料資源や財産を共有する母系リニージとアイナンとよばれる母系クランをとりあげ、その集団構成の枠組についてふれる。最後に、資源に恵まれないサンゴ礁の小島における、食料資源の統制および島社会の秩序を維持する権威のありかたを述べることにしよう。

### 居住集団の構成原理

サタワル社会で、日常的な生産活動、生計や消費をともしる生活集団は、1章でふれたように特定の居住地に共住する人びとより構成される。その集団の構成員は、妻（母）方居住の方式にもとづくため、母系リニージの女性成員と彼女たちのもとへ婚入してきた男性、彼らの子どもと養子である。リニージの女性成員が共住する土地および彼女たちを中心に形成される居住集団がプッコスである。現在、五百人の人びとは十五のプッコスに別れて住んでいる。一つの固有名（土地名）をもつプッコスは、中庭を囲むかたちで数軒の家屋（イームム）、一戸の共同炊事小屋（マヌームム）の建物群よりなる。

プッコスの境界は、低い石垣で仕切られる。石で囲まれた敷地には中庭と建物のほかに、サツマイモやタバコを植えた畑がある。中庭や家の周囲にはサンゴ礫を一面に敷きつめる。サタワルの人びとは、このサンゴ礫を敷いた空間を、人が住む場所、つまりプッコスとみなしている。伝統宗教のもとでは、

プウコス居住者の死者はこの空間に埋葬され、死者の身体はここに永久にとどまっていると考えられていた。プウコス成員に病氣などの不幸がふりかかったときやリニージの男性がカヌーで航海に出かけるときに、その墓地に供物を捧げて儀礼を行った。つまり、プウコスは人びとが日常的な生産と消費の生活をおくる場所としてだけでなく、祖霊と深く結びついた祭祀的空間でもあった。

#### 根つきの人と飛んできた人

サタワルでは、特定のプウコスに権利をもつ人びとを三つに類別している。そこで生まれた人、婚入した男と養入した人である。プウコスで生まれた人、つまりリニージの成員は、「芽を出した男ないし女」（ムアーン・ニ・フォトないしイナ・ニ・フォト）とよばれる。語尾の「フォト」は植物を「植え」ことを意味する。したがって、それらの語義は「特定の土地に根つき、そこから芽を出した男ないし女」であり、「土地から出てきたほんとうの人」を表わす。それにたいし、婚入してきた他のクランの男性は、「飛んできた男」（ムアーン・ニ・レット）とよばれる。それら二語は婚姻を契機にして変化する男性の地位を示している。ムアーン・ニ・フォトはプウコスから婚出しても、そのプウコスの「真の男」としてリニージ成員にたいし不動の権威を保持している男性の一面を表わしている。一方、ムアーン・ニ・レットは妻のプウコスへ「働くために飛んできた男」で、妻と彼女の兄弟（ムアーン・ニ・フォト）の監督下におかれる男性の地位を示している。

養親のプウコスで生活する人は、「こじあけてきた人」（ファームト）とよばれる。養子は養親のリニージ成員と同等の資格で、そのリニージの財を使用する権利をもつ。そのため、養子が女性の場合、彼

女の子孫はそのまま養親のプウコスで生活することになる。数世代にわたって住みつづけると、リニージの実の成員と養取によってくみこまれた女系子孫との区別が不明確になるおそれがある。それらを類別するときには、「入りこんだ人」という用語で表わす。この語は養取を契機としてプウコスの成員になった非リニージ成員だけでなく、リニージにくみこまれた他島出身の「女性の子孫」もさす。

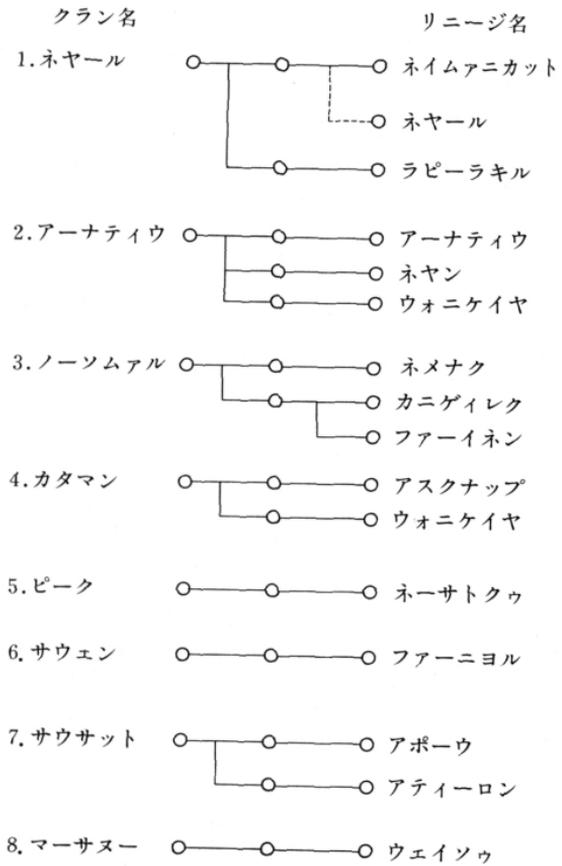
#### 母系親族集団

母系リニージの成員は、お互いに女系の系譜関係を認知できる。一人の女性始祖までの世代深度は、通常生きているリニージ成員の最上世代者から三〜四世代までである。母系リニージは、「一本の木から分かれた枝」(エウ・ラー)とよばれる。人びとはそれが分かれる様子を、一本の木の幹とそれから分岐する枝葉の図を描いて説明する。それは、木の幹(クラン)が太くなる(人口が増加する)につれて、枝を張り出して(新しいリニージに分節して)成長する樹木のたとえである。サタワル社会のリニージの名称は、その女性成員が居住している屋敷(プウコス)の名前に由来する。居住地名を冠したりニージは十五を数えるが、それらは八つのクランから分節したものである(図9)。一クラン内の複数のリニージ間には序列がある。1章でみたナティクのリニージは、アーナティウ・クランの分節集団で、ネヤンとよばれる。そのリニージは、クランのなかで最優位のランクにある。

#### リニージの分節と序列

クラン内のリニージ間の序列は、三つの原理で決定される。一つは、リニージの女性祖先がサタワル

島へ移住してきた時代で、より古くこの島に定住した女性の母系子孫が優位な地位につく。二つめは、分節集団を形成する世代において、女性キョウダイの年長者（姉）の系統が年少者（妹）のそれより高い地位につくという原理である。そして、三番めの原理は、同世代の関係者においては、一人の母親から生まれた子どもたちの出生の順位である。男の子のなかでは長男、女の子では長女が最上位になる。この順位は各世代をとおして規定されるので、始祖の長女の直系の系統が通代的に最上位ということになる。したがって、個々のリネージにおいては、最優位の系統の最上世代、最年長の男性と女性がそれぞれ



註 ネメナクの集団は、現在カニゲイレクに居住。ただし、財は、共有していない。

図9 クランの分節とリネージ

れ「リニージの族長」の役につく。そして、リニージ間では最上位の序列のリニージの男性族長がクランの酋長（サムォーン）になる。族長や酋長の地位は母系的に継承される。

#### 財産共有体としてのリニージ

サタワルの人びとの主食となる食料は、ココヤシの実、パンノキの実とタロイモである。リニージはそれらの食料を収穫する土地（財）を所有し、使用、管理する基本的社会集団である。しかし、それらの財にたいする権利は、リニージ成員に均等に配分されてはいない。その権利の不均衡は、食料資源をリニージ間で贈与するという慣行による。リニージの男性は彼の妻と彼らの子どもに、ココヤシ林、パンノキとタロイモ田を贈ることが義務づけられているからである。子どもの立場から見れば、彼らは父と母（自分）の双方のリニージにたいし自分で保有し、使用する財をうけとる権利をもつことができる。したがって、リニージ成員はいくつかの財を共有する単位に分かれる。

リニージは、財を所有し、使用する権利の保持者を軸に類別すると、少なくとも三つの集団より構成される。一つは、リニージ成員のすべてをふくむレベルで、リニージが代々所有してきた財にたいして、均等に権利を主張できる人びとによって編成される。この財はラピ・ヌ・ムォゴ（リニージの）元来の食料資源」とかラピ・ヌ・ファヌ（元来の土地」とよばれ、リニージの全成員によって共有される。リニージの男性成員は婚出していても、リニージの「元来の土地」を使用する権利を保持している。また、共有財であるパンノキの伐採やココヤシ林の植えかえを決定し、共有財の他リニージへの贈与などの問題を解決するのは、リニージの男性と女性の族長の責任となる。

二つめは、リニージに婚入したほかのリニージの男性が贈与した財を共有するリニージ成員によって形成される「集団」である。この財は「元来の土地」と區別され、ファンガ・ト・ムオゴ（ファヌ）（贈られた食料資源（土地））とよばれる。それが贈与される時期は、男性の婚姻時とその子どもの誕生後である。贈られた財を使用し、管理するのは、子どもが成人に達するまでは、贈与した当人（父）とその妻である。父の死後、ココヤシ林とパンノキは父から息子へ、タロイモ田はその妻（母）から娘へと相続される。男性（父）が子どもにも譲渡した財は、子どものリニージの共有財とは明確に區別される。たとえ、子どもの母方オジヤリニージの族長であっても、それら財をとりあげたり、勝手に処分することは許されない。父から贈られた財は、子どもからみれば、父親を同じくする兄弟姉妹の「私的」占有物である。

兄弟姉妹の共有財は、長男がココヤシ林とパンノキを管理、監督し、長女がタロイモ田を配分し管理する。そして、兄弟が婚出し子どもをもつと、それらの財を彼の妻や子どもにも贈与するのである。この場合、贈与財として最優先されるのが父から譲渡された財である。父が生存していれば、彼がどの程度の数量を息子の子どもに移譲するかを決定する。しかし、彼の死後においては、長男を中心にキョウダイが話し合い、合意のうえで贈与財の数量を決める。この処分にたいし、母親の意見は参考にされるが、彼女の男性キョウダイをはじめリニージ成員の干渉をうけることはない。

三つめの「集団」は、リニージ全体と「キョウダイ集団」との中間のレベルで構成される。それはリニージに婚入した男性が財を持参したにもかかわらず子どもがいなかったり、娘だけであったりして、その財がリニージに世代をこえて保有されている場合に生じる。また、婚入した男性が大量の財を贈与

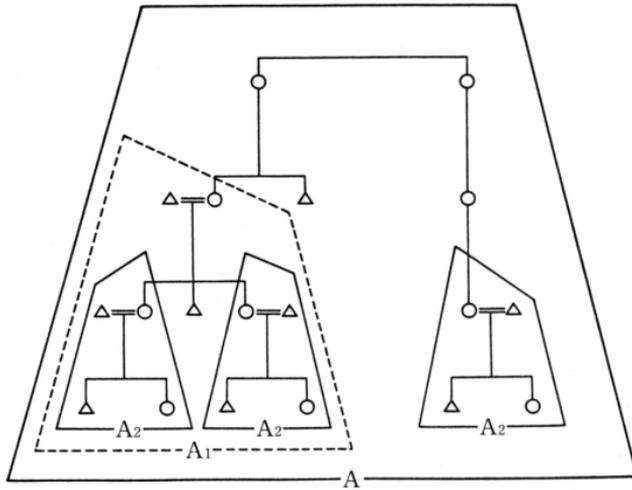


図10 リニージ内の財を共有する分節的単位

したが、彼の息子たちがその財の一部を処分しただけで、残余の財がリニージに現存している状況のもとでも形成される。

これら三集団の関係を模式図で表現すると図10のようになる。同図から、リニージは女性始祖からうけついできた「元来の土地」を共有する成員によって成立している最大の自律的集団の単位(A)、中間レベルの集団(A1)、そして父からの贈与財を共有する実の兄弟姉妹よりなるキョウダイ集団(A2)というように、土地共有体として重層的構造をもっていることがうかがえる。

食料資源の共有という局面で、リニージが重層構造を示す傾向は、それがつねに分裂する可能性を示すものである。リニージの内部に財の共有体として形成される「集団」は「潜在的リニージ」であり、それまでのリニージ成員と居住地(プুকコス)、炊事小屋(マヌウーム)、家屋(イームウ)を別にしたときに独立し、新たなリニージに分節するのである。

リニージと男性成員の子ども  
母系リニージの男性成員は、前述したように結婚時と彼

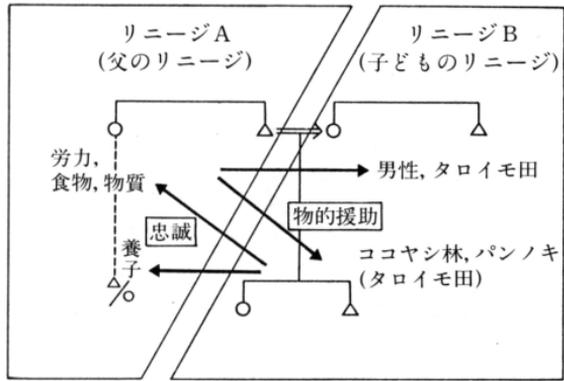


図11 子どもと父のリニージの関係

の妻の出産後にタロイモ田、ココヤシ林やパンノキを贈ることが義務づけられている。この慣行は、すべての財産を母系的に相続するのではなく、父と子のあいだでも部分的に財を譲渡する制度である。サタワル社会では、子どもと父の親族集団の関係はアフアクルとよばれる。アフアクルは「母系リニージの男性成員の子ども、ないし後継者」というほどの意味である。彼らは父のリニージに父よりほかに成員がいない場合には、その「あとつぎ」になる資格がある。彼らは、日頃から父の生まれたプウコスに顔を見せて食事をしたり、そのカヌーを自由に使用したり、ココヤシを無断で採取することができる。

母は断われない性質のものである。また、アフアクルは成長後においても、父のリニージの家やカヌー小屋の修理や屋根替え、カヌーの建造などの機会には、労働力を提供したり、その作業を手伝った人びとへの謝礼(タバコや食べもの)を調達することを期待される。そのリニージに病人や死者が出たときには、ココヤシ、食べものを持参して見舞にかけつける。もしそれらを怠ると、父の姉妹や母親から、贈与されたタロイモ田やココヤシ林などを取り返される破目になる。このように、アフアクルは父のリニージの財を使用したり相続する権利をもつ一方で、そのリニージに人的、物質的援助をすることが義

務づけられているのである。アファクルと彼らの父の母系リニージの関係を示したのが図11である。

サタワルの母系リニージ(クラン)は、母系出自を集団編成の基本原理としているが、その男性成員の子どもを養子としてひきとるだけでなく、「準成員」としてくみこむ構造的柔軟性を特徴としているのである。しかしアファクルは、父と子という二世代かぎりの関係であり「父系的」に連続する性格のものではない。したがって、サタワル社会の母系出時集団は、集団間での食料資源の贈与と、集団の男性成員の子どもを「二次成員」として確保することによって、その存続がはかられているのである。

### 母系クラン

サタワル社会には、現在八つの固有の名称をもったアイナンとよばれる母系出自集団、つまり母系クランがある。人びとはそれらのどれか一つに帰属している。八つのクランの名称は、(一)ネヤール、(二)アーナティウ、(三)ノースムアル、(四)カタマン、(五)ピーク、(六)サウエン、(七)サウサット、(八)マーサヌーである(図9参照)。八クランで系譜をたどれる最古の祖先までの深度は、古いもので八世代、新しいクランでは四〜五世代である。サタワル島が台風の襲撃をうけ飢饉になったときに、ネヤール・クランの男性祖先が島の半数の人びとを連れてサイパン島に移住したという伝説がある。これは歴史的事実と信じられており、一八一〇年ころと推定される。その祖先はネヤール・クランの系譜のうえでは、クラン最古の女性祖先の兄であると語られている。これを事実とするなら、サタワルに現存するクランの系譜は一八〇〇年までさかのぼれることになる。

## クランの移住伝承とその序列

八つのクランは、それぞれ移住の起源地とサタワルまでの移住の経路を伝える歴史伝承をもっている。これはラピト（クランの）来住の根幹となる伝承」とよばれ、クラン成員外に伝授することが禁じられる話である。その内容は、住んでいた島で戦争が起きたり、食べるものがなくなったりして、キョウダイがカヌーやかだで西方へ向け脱出・漂流し、ある島に流れつき、そこからさらにいくつかの島に移住を繰り返かえし、最後にサタワル島に到着した、というものである。

各クランのラピトによると、(一) ネヤール、(二) アーナティウ、(三) ノーソムアル、(七) サウサットの四クランの起源地は、いずれもサタワルから千五百キロメートルも東方のコシヤエ島である。それらはサタワル島へ移住した時期がほかの四つのクランよりも早いと伝えられている。そのうち、サタワルの「最初の人」はサウサットである。サウサット・クランは、後続のネヤール、アーナティウ、ノーソムアルの各クランに土地を分け与え、島の統治権を譲渡した。<sup>(4)</sup>それで、それら三クランが「酋長クラン」の座につき現在にいたっている。酋長クランのあいだでも、来島の順序にしたがって、ネヤールが第一位の酋長をだすクラン、第二位がアーナティウ、第三位がノーソムアルとみなされている。

酋長クランよりあとにサタワル島へ移住してきたクランは、三酋長クランから庇護され、土地を分与されたという。そのために、土地の贈与集団と受贈集団とのあいだで、社会的地位の格差が生じ、後者は前者の「言うことをよくきくひと」になった。あるいは、それら二集団間の関係は、「お互いに知っているあいだなら」ともいわれる。マーサヌーはネヤール、カタマンとピークはアーナティウ、サウエ

6 母系社会の構成

表2 サタワル島のクラン人口の変動

クラン名	年		1909年		1931年		1980年	
	男	女	男	女	男	女	男	女
1. ネヤール	29	22	36	37	38	48		
2. アーナティウ	6	?	15	14	40	35		
3. ノーソムアル	18	6	20	21	66	45		
4. カタマン	22	26	22	22	30	26		
5. ピーク	3	7	8	15	6	7		
6. サウエン	9	10	8	7	16	14		
7. サウサット	4	6	11	9	34	27		
8. マーサヌー	6	7	12	16	18	15		
その他					11	13		
ファニウィル	1							
ウイスース		1						
サイバン島より		2			1			
オレアイ島より	3	2			2			
イファリク島より	1							
計	102	89	132	139	262	230		
総計	191		271		492			

註 ファニウィルとウイスースは絶滅したクラン。

ンはノーソムアルに、それぞれ従属している。主従関係にある二集団は、従属的地位にある集団が保護者的立場にある集団のカヌーヤカヌー小屋の建造、修復などの機会に労働力を提供することを義務づけられている。このようなクラン間の主従関係は、島社会のレベルでは「酋長クラン」と「平民クラン」とよばれ、階層差として認識される。

酋長クランと平民クラン

一九〇九年から七十年間におけるクラン成員の人口の変化を表2、表3を参考にしてみると、一九八〇年にはノーソムアルが最多の百十一人、最少がピークの十三人である。三酋長クランは成員数のうえで平民クランを圧倒している。クラン成員数の変動では、アーナティウを除けば、他の二酋長クランは安定した人口を擁している。七十年間に島の人口は二・六倍に増加しているが、酋長クランもそれにほぼ比例するかたちで成員数を増している。

酋長クランと平民クランとの階層差を示すものとして、まず集会における発言権のちがいが

表3 サタワル社会のリネージ、人口と土地所有

クラン	リネージ (ブッコス)	世帯	人口	土地		タロイモ田		パンノキ	婚入者 1880～ 1980年	婚出者 1880～ 1980年
				総区画	元来	総区画	元来			
1 ネヤール	ラビーラキル	10	32	32	14	18	10	187	74	65
	ネイムァニカット	3	13	11	2	6	2	55		
	ネヤール	2	15	7	4	7	4	91		
		15	60	50	20	31	16	333		
2 アーナティウ	アーナティウ	5	45	27	17	25	5	130	43	60
	ネヤン	6	40	28	15	23	14	115		
	ウォニケイヤ	1	5	11	5	8	2	22		
		12	90	66	37	56	21	267		
3 ノーソムアル	カニゲイレク	7	42	32	16	29	6	113	56	51
	ファーイネン	12	71	34	8	46	3	?		
		19	113	66	24	75	9	113		
4 カタマン	アスクナップ	8	61	29	16	24	7	138	49	42
	ウォニケイヤ	2	10	12	7	5	3			
		10	71	41	23	29	10			
5 ピーク	ネーサトクウ	5	20	16	7	11	3	106	22	12
6 サウエン	ファーニヨル	3	23	27	15	19	10	96	22	26
7 サウサット	アポーウ	5	19	15	7	12	6	151	32	41
	アティーロン	5	39	13	5	17	9	108		
		10	58	28	12	29	15	259		
8 マーサヌー	ウェイソウ	13	57	28	13	28	1	142	32	27
計		87	492	322	151	278	85	1454	330	324
		世帯	人	区画	区画	区画	区画	本	人	人

註 1) 上の表で「元来」と表記した土地は、リネージが「元来から所有している土地」を意味する。したがって、総区画数と「元来の土地」の区画数との差がリネージ間で「贈与した土地」の数である。

2) リネージの世帯と人口は、屋敷地（ブッコス）の居住者数であり、リネージの成員数ではない。

あげられる。サタワル社会の集会は成人男性によって構成され、女性の参加は認められていない。集会の場で、酋長の話を質問し、意見を述べることが許されるのは、酋長クランの男性成員と平民クランの族長だけである。平民クランの出身者は、たとえ偉大な航海者、伝統的知識を修得している長老であっても、自分から意見を述べたりすれば「道をとおさない男」とみなされ、非難をあびることになる。

政治的場面にかぎらず、儀礼の場においても階層差がみられる。たとえば、酋長クラン成員の葬送儀礼のとき、人びとは死者の家の周囲で木に登ることや物を頭上にのせて運ぶことが禁じられたり、一定期間の「労働の禁忌」を守る。また、酋長クラン成員にかぎって、死後一年以内に、盛大な追善儀礼が催される。しかし、日常的な対人行動や生産活動においては身分のちがいは現われない。平民クランの成員が酋長クランの成員に表敬行動を義務づけられるとか、平民クランの成員が酋長クランのために食料生産に従事することはない。酋長クランの酋長であっても、島の一人の「男」として漁労活動、ココヤシ林の手入れやパンノキの実の採取などの諸活動に従事する。

#### 酋長への初物献上

人びとは島の第一酋長であるネヤール・クランの酋長に、食べものを献上する。その献上物はパン果の初収穫物とココヤシの木の新芽から採取する液汁である。前者は「初めてのパン果」、後者は「最初のココヤシの液汁」とよばれる。パン果は豊作の年で一軒の家あたり一籠（八〜十個）、ココヤシの液汁は成人男性一人あたりびん一本（四合）である。ネヤール・クランの酋長はそれらの一部をとったあとで、残りを島の人びとに再分配する。この初物献上は「ネヤールクランが島の最初の統治者」である



酋長へのヤシ果汁の献上

からと説明される。この献上が終了しないと、島の人びとはそれら  
を採取して食べることが許されない。

初物献上はパン果とココヤシの液汁の数量からもうかがえるよう  
に、酋長がそれらの贈与によって「富を蓄積する」といった性質の  
ものではない。これは伝統的に、彼がパンノキヤココヤシの豊穰儀  
礼を主催・指示する権限をもっていたことも関連している。パン  
ノキが実をつけ始める時期（一〜二月）に、ネヤール・クランの酋  
長は、パンノキの豊穰を司どる「パンノキの知識修得者」にその年  
のパン果の豊・不作を占う儀礼を催させた。この占いはタロイモと  
ならんでパンノキの実に食料資源を依存しているサタワルの人びと  
にとって重要な意味をもっていた。パン果は一年中収穫が可能なタ  
ロイモと異なり季節的収穫物であり、またその年の降雨量によって  
豊・不作が生じるために、超自然的存在の加護のもとに栽培されるという特徴がある。したがって、パ  
ン果の貢納は呪術・宗教的力によって豊饒をもたらすことを企図する酋長への、「謝礼」としての贈り  
ものとみなすことができる。

### 母系クランの機能

複数のリニージによって構成されるクランは、食料資源（土地、ココヤシ林、パンノキ）を共有する

実体となっていない。また、クラン成員が参集して系譜関係を確認し、クランの統合や結合を強化するための儀礼（祖先祭祀など）は存在しない。しかし、集会所（カヌー小屋）や大型帆走カヌーは基本的にはクラン単位の所有物である。秘儀性のつよい伝統的知識のうちいくつかの項目は特定のクランによって占有される。たとえば、カツオなど大型回遊魚の招来、パンノキの実の豊穡、嵐鎮め、航海術やカヌー小屋の建造法に関する知識の体系である。秘儀的知識や呪文を保持し、儀礼を司祭する権利は、特定のクラン成員のあいだで母系的に継承される。それらがほかのクランに流出してしまうことを極力避ける。この点では、クランは「秘儀的知識共有体」と規定することができる。

クランはまた、性関係と婚姻を規制する単位として重要である。同じクランの人びとのあいだでの結婚は、「最悪のことから」とみなされる。その禁忌を犯した当事者は、島から追放される。このインセント・タブーと婚姻の規制はサタワル島出身者だけでなく、同じ名前や同系の名称をもつ他島のクラン成員とのあいだにもおよび。一方、異なる島じまにいるクラン成員は、相互に援助しあう。他島からきた同じクラン成員の滞在中の食事、宿泊をはじめ、あらゆる世話をすることが、サタワルのクラン成員の責任となる。他島出身者がこの島に永住する場合には、財の使用を認め、結婚するときには財を分与し、贈与する。つまり、ほかの島から来た人びとは、サタワルの同じクラン成員としての権利と資格を得ることができるのである。サタワルの人びともカヌーや連絡船で他島を訪れるときには、自分と同じクラン成員がその島にいるか否か、いる場合には、その人とのような系譜関係になるかを知ることが必須事項となる。そして、サタワルのクランに後継者や酋長になるべき男性がいなるときには、他島の同じクラン成員をよびよせてその役についてもらう。

## 社会秩序の維持と食料統制

一九八〇年一月一日に招集された男の集会で、三人の酋長たちは合議のうえでつぎのような通達をだした。

- (一) ヤシ酒をつくって飲んだ場合五十ドルの罰金を払うこと。
- (二) 裾礁周辺で鉄製のヤスで魚をとったり、夜間に懐中電燈による漁をした男は五十ドルの罰金を支払うこと。
- (三) 家の周囲をきれいにし、地面に食器などを置かないこと。それに違反した場合は一ドルの罰金を義務づける。
- (四) 森でココヤシの胚乳だけを食べ、果肉を捨てると「食料獲得の規制」を実施する。
- (五) オレアイ島から来島している人びとへの食料支給を、毎日、プウコス単位で行うこと。

### 酋長の権限

酋長が話し合いで決めた五つの事項について、人びとは反対意見を述べることは許されない。酋長が通達を出したのは、当時それらの事項を守らない人が多くいたからである。(二)の禁止は、その時期に海が荒れ島の周辺での漁労活動ができる日数が限定されるので、裾礁でヤスの突き漁をすると、岩にあたるヤスの音で魚が島に寄りつかなくなるという判断にもとづいている。(三)の指示は州政府から

の生活改善の指令であり、(四)は食料資源の枯渇期に食料を無駄にすることへの警告である。また、(一)については、ココヤシの新芽を切りとるためにその芽が成長して実をつけなくなるといふことと、ヤシ酒を飲んで夜に大声を出したり、争いごとを起こしたりすることを未然に防止する策でもある。いづれにせよ、(一)～(三)までの事項に違反したのから徴集する金は、酋長の管理のもとに貯えられ、祭宴の費用にあてられる。酋長たちが提示したその「掟」は、集会に参加した各クランの族長や、屋敷(プッコス)長をとおして人びとに知らされる。

サタワル社会の政治機構は三人の酋長(と次期酋長)で構成される「酋長会議」が、島全体および対外的問題に対処する最高決議機関であり、そこでの決定が成人男性の参加する集会で提示され、人びとに伝達されるしくみになっている。酋長の決議事項は絶対命令という性格が強く、集会の場で参加者の意見によってくつがえされることはほとんどない。他方で、酋長の命令や裁断的的確、不的確は、島の人びとの「世論の声」によって評価される。この評価は酋長の言動一般にも関わることで、その命令には「他意がない」とか「自分のことしか考えていない」、その裁断は「まっすぐの道をとおしている」というように表現される。島の人びとが酋長に期待することは、「伝統的規則」に従って判断し、「島のことを悪くしない」ようにはかることである。私利、私欲による言動はもつとも忌み嫌われる。しかし、酋長が島の共用金を横領した場合(実際にあった話である)でも、酋長にたいする悪いうわさはたつもの、酋長の地位を奪う権利を島の人びとはもっていない。酋長の地位はあくまで世襲制である。

れ、島の人びとのタロイモ田やココヤシ林への立ち入りを一定期間禁止することである。食料資源の利  
用を規制するメラーンには四種類ある(図12参照)。

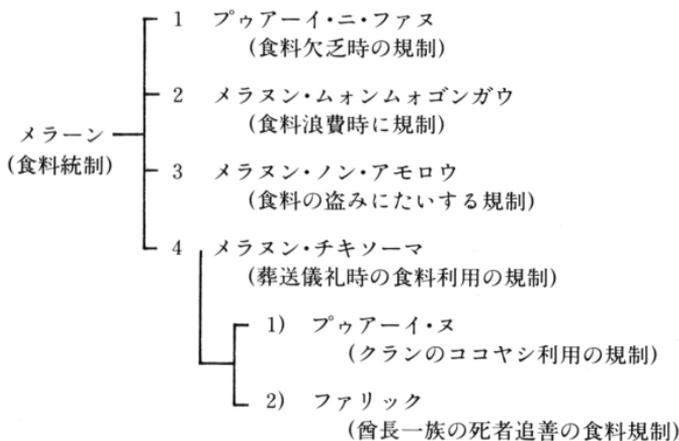


図12 食料資源の利用規制の種類

#### 島の資源利用と酋長の役割

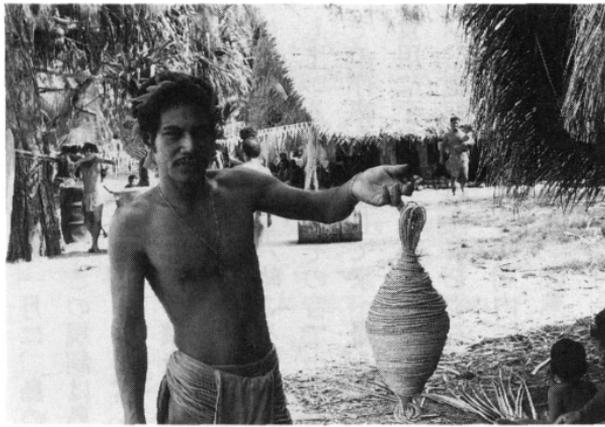
サタワルの人びとは、主食をタロイモとパン果に依存している。タロイモは一年中収穫が可能であるが、それだけで島の全人口の食料をまかなうことはできない。約半年間はパン果にたよる。パンノキが実をつけないあとの半年の食料として、貯蔵パン果(マール)がつくられる。パンノキは年間の降雨量が極端に少なく(五〇〇ミリ以下)なると結実せず、マールとして貯蔵することが不可能な年もある。人びとは一年のうちパン果のある半年間(四〜九月)を豊かな食料に恵まれるが、残りの半年間を欠乏した食料事情のもとで暮さなければならぬことになる。

酋長は限定された食料資源を有効に利用するために、いくつかの規制を出す。彼らは資源の枯渇期や人びとが食料を浪費したり、資源利用にからむ争いを起こしたときなどに、食料獲得活動を制限する。この規制はメラーンとよば

## 食料資源の統制

パンノキの結実量が少なく貯蔵パンノキを十分につくれなかった年には、かならず島の食料資源が不足する。最近では、一九七九年の一月から三月にかけて食糧が極端に欠乏した。人びとは、一九七八年のパンノキの実が枯渇してから、その年内はマールとタロイモで食料を確保できたが、クリスマス祭でマールをほとんど消費してしまった。手の拳大のタロイモ一個で、その日の飢えをしのいだという。酋長は一九七九年の一月に、島の人びとが森に出かけてタロイモを収穫したり、ココヤシの実を採取する活動を制限した。この規制は島の居住空間（村）と森との境界にあるココヤシの木に、ココヤシの葉をまきつけることによって人びとに表示される。これはプアーイ・ニ・ファヌとよばれ、「島の食料をとる土地への立ち入り禁止」を意味する。

酋長はプアーイをかけたあと、女性たちが週に二日だけ森へ行くことを許可した。森へ入れる日には、酋長が早朝（六時ころ）ホラ貝をふき鳴らして、田で食料獲得の仕事をすることを許す。家で待機している女性は、その音で一斉に森へ急ぐ。酋長はお昼になるともう一度ホラ貝で合図する。これは田での作業を中止して家へ帰るようにとの指示である。この約六時間に、女性たちはタロイモ田へ入り、食用にするイモの掘り起し、そのあとに畝をつくって苗の植えつけ、すでに植えてあるタロイモ田の除草、施肥などの仕事をする。お昼のホラ貝を聞くと、女性たちは直ちに収穫したタロイモを持って家へ帰る。女性がこの時間内で掘れるタロイモの量は、通常の半分にも満たない。男性も朝女性より遅れてココヤシ林に入り、成熟して落ちたココヤシの実を集積したり、木の枝打ちや下刈りなどの作業をする。酋長はこの規制が守られているかどうかを調べるために、数人の監視人を選ぶ。監視人には酋長クラ



「罰金」として支払われるヤシ紐

ンの青年があたる。公表しないので島の人びとには誰がその役についているかわからない。彼らは家へ帰る合図のホラ貝を聞いてから森の中を見て回り、人の有無を調べる。まだ森に残っている人があれば、違反者として酋長に報告する。違反者は「ホラ貝のあとから来た人」とよばれ、所定の罰が科せられる。酋長の命令や島の慣習法を守らない人にたいする制裁は、ふつうパッキン（罰金）の徴集である。この場合は、十ドルと決められている。それを支払えない人は女性なら腰布二十枚、男性ならココヤシの繊維でなったロープ百尋をもって酋長のところへ謝りにゆく。それもない人は島の大きな道の草とりや清掃の仕事を労役として行う。違反者を出すことは、克蘭の「恥」とされ、克蘭成員の連帯責任となる。

この規制が発令されると、土地を保有するリニージは、その集団だけの裁量で作物の収穫と消費を行うことが不可能となる。集団の枠をこえて、島全体で資源の消費を調整することによって、限定された食料資源を有効に利用することを可能にしているのである。酋長は島の食料状況を的確に掌握したうえで、タロイモ田やココヤシ林を保有する人びと（集団）がそれを個別的に、かつ自由に使用する権利を、一時的に抑制、停止する権限を保持している。このような、酋長の統制にもとづく島の食料利用の制限は「共同体規制」とみなすことができる。

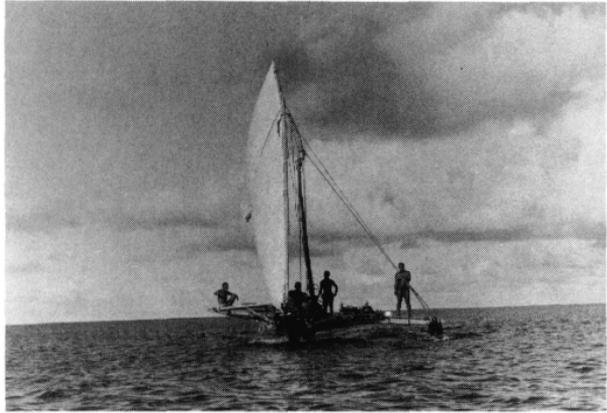
## 食料資源の浪費や盗みにたいする規制

通達（四）の食料資源の浪費にたいする規制は、女性が果肉のついたココヤシの実を割ったままで炊事小屋のまわりに投げ捨てたり、成熟したパンノキの実が木の周囲に落ちて腐っているのに、その実を収穫しないときなどに実施される。この規制を破ると森への立ち入りの禁止だけでなく、肉体的な罰がくわわる。酋長は島の女性たち全員を集会所（カヌー小屋）に集めて、ココヤシやパンノキを無駄にした例をあげ警告する。そのあとで、それらの食料を利用しないで放置したりニージの女たちは、海岸の砂浜の上にすわらされる。彼女たちのまわりにはロープがはられる。この制裁はフィフとよばれる。炎天下で砂浜の上にすわりつづけることは相当の苦痛で、フィフは三時間くらいで解かれる。

若者がほかの集団のココヤシやサツマイモなどを無断でとったり、女性が他人のタロイモ田へ勝手に侵入した場合にも、酋長の権限で資源利用が規制される。タロイモ田で生ずる争いは、イモ田に他人の足あとがついていたり、タロイモをひき抜かれたりした場合に起きる。それをした人が同じクランの成員でないことを確認したうえで女性は酋長に申し出る。また、タロイモ田の畔が自分の方にくいこんでつけられたときには、被害者は酋長にその件を申し出て仲裁してもらう。このような境界争いが集団間で続発すると、酋長は二週間程度の収穫禁止の規制を実施する。この規制は、いずれも島の人びとが食料資源を利用する慣習法を犯した場合にかけられるものである。

## 無人島の資源利用と規制

サタワル島は、食料資源を確保できる二つの無人島を領有している。ウエスト・ファール島とピケロ



大三角帆に風をうけ航海中のカヌー

ット島である。それら二島にはココヤシが生えており、コブラの生産も可能であるが、資源利用は漁獲が中心となる。人びとは島で祭宴や儀礼のために大量の魚介類が必要なとき、あるいは島の周囲での漁獲がないときに、大型カヌーでそれらの無人島へ出かけ、漁労活動に従事する。一九七八年六月から翌年五月のあいだの航海は、のべ七回（二十三艘のカヌー）を数える。大型カヌーでそれらの島へ行くには、一昼夜を要するため、生の魚介類は腐ってしまい、サタワル島へ持ち帰ることはできない。漁獲物はウミガメがほとんどで、ほかに乾した魚やシャコ貝、燻製や石蒸しにした魚、酢づけの貝類などである。ウミガメは捕獲後最低一週間は生存することと、それ一匹の肉や臓物で百五十人分の食べ代を提供できるからである。

が、無人島へ航海する場合には、かならず酋長の許可を必要とする。酋長がその島の資源を管理、監督する権利をもっているからである。そこからとれる食料は「島の人びと全員の食べもの」とみなされる。無人島へ出かける男たちは、その島に滞在中、島へ持ち帰るウミガメの捕獲や漁労に専念する。最悪の場合でも、島の人びと全員に分配できるだけの漁獲をあげなければならない。ウミガメは最低三匹、魚と貝は約五百人にゆきわたる数量である。

サワルの人びとは優越クラン、つまり「酋長クラン」の酋長を「怖い存在」とみなしている。それは集会における決定や命令からもうかがえるように、小さな島社会における「絶対者」ともいえる。しかし、日常生活場面での酋長は、ほかの男性と同様に、家族のために生産活動に従事している。酋長だからといって、経済的特権を享受しない。サワル社会の酋長の権威が、作物や漁獲物の統制・分配の局面で顕在化するように、酋長は島の食糧資源の管理者という性格が強い。

これまで述べてきたことから、小さなサンゴ礁島で生活する人びとは、母系出自を社会集団を編成する基本原理としながらも、実際の資源利用および集団の存続といった面では、柔軟な「制度」をつくりあげていることがあきらかになった。一つは、集団間での財の贈与・相続の慣行である。これは母系相続を保持しつつ、財の一部を父—子相続させるものである。この「父系的」な相続法は、母系集団が集団から婚出する男性と彼の子どもに食糧資源を給付する方式であり、集団間で人口と食糧資源とのバランスを保つことにつながる。もう一つは、父—子相続とも関連するが、母系親族集団の男性成員の子どもを、その集団の「二次成員」として位置づけていることである。これは親族集団の成員減ないしその絶滅の危機に直面したときに、非集団成員を集団の支援者ないし後継者として確保する方法である。したがって、食糧資源に恵まれない環境に適應する社会集団を編成するには、母系の単系出自原理のみでは不十分であり、それを補強する方策として父—子を軸にする人間関係を固定化させているのである。

## 7 社会的規範と行動

サタワル社会では、出会った二人が「何処へゆくか」とか「何処からきたか」とか質問しあうのが挨拶ことばになっている。また、いっしょにいた二人が別れるときには、去る人が留まる相手に「そのままいなさい」といい、後者は「ゆきなさい」という意味のことばを口にする。その会話が挨拶である。

そのような挨拶とは別に、われわれの目をひくのは、女性がある男性の側を四つん這いになって通りすぎたり、会議の席で若者が長老の前を腰をかがめ右手を下に差し出して横ぎる行為である。また、長老が若い娘に丁重に話しかけたりする光景をよく目にする。それらは、個人が特定の関係にある人と接触するさいに要求される一種の「礼儀作法」である。そのほかにも相手にたいすることばづかい、接しかた、姿勢のとりかた、相手の持ち物の借用法などについてもこまごまとした約束ごとがある。

個人が対人関係においてとるべき行動様式は、一般的には、自己と相手との相対的な社会的地位によって決定される。その地位を決定する要因は、主として、自己の系譜上の位置、性、世代、年令などである。ここでは、行動規範のうち、社会人類学でいわゆる「忌避 (avoidance)」とよんでいる行動パターンをとりあげて、サタワルの人びとの対人行動を述べてみよう。

## 人間関係の類別

サワル社会で人びとが他者に呼びかける場合には、相手の個人名をそのままもちいる。子どもが自分の父、母に話しかけるときでも、「ナモニク、来て食べなさい」とか、「ラトマイ、どこへ行くの」というように、ナモニク、ラトマイと、それぞれ父母の個人名を呼びすてにする。自分の兄弟姉妹や祖父・母にたいしても同様の呼びかけをする。非親族関係者に話しかけるときでも、相手の個人名や洗礼名が呼びかけのことばとしてもちいられる。つまり、この社会には、「おとうさん」とか「ママ」といった他者への呼びかけのための名称、すなわち呼称名称がないのである。しかし、「私はあなたの子供である」とか、「彼は私の父である」というように自分と他者との親族関係を同定する名称、すなわち指示名称は存在する。

## 親族名称

関係名称を分析するさいには、世代、性、系や相対的年齢を区別しているか否かを検討の基準にして類別する。その基準にしたがって、**図13**と**表4**で示したサワルの指示名称を検討してみよう。この親族名称においては、兄と弟、姉と妹などの相対的年齢は区別されないが、世代、性と系に関してはつぎのような特徴がある。

(一) 親族は、世代、性(相手の性および話者の性)と系にもとづいて、サム、イーン、ツクファ

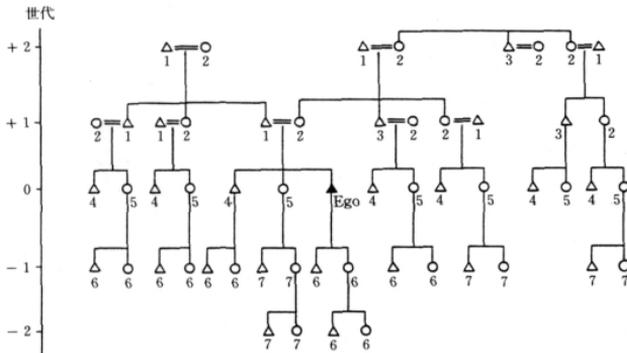


図 13 親族関係図

表 4 関係名称とカテゴリー

名 称	直 訳	カ テ ゴ リ ー
1. サーム	「父」	F, FB, FF, MF, FZH, MZH, MMZH, WF, WMF, WFF, WFB, WMB, WMZH, HF, HMB, HMZH
2. イーン	「母」	M, FZ, MZ, FM, MM, MMZ, FBW, MBW, MMBW, MMZD, WM, WMM, WFM, WMZ, HM, HMM, HMBW
3. ツクファイ	「老人」	MB, MMB, MMZS
4. ブゥイー	「兄弟」ないし「姉妹」	(M. S.) B, FBS, FZS, MBS, MZS, MMZSS, MMZDS, WZH, (W. S.) Z, FBD, FZD, MBD, MZD, MMZSD, MMZDD, HBW
5. ムウエギャン	同上	(M. S.) Z, FBD, FZD, MBD, MZD, MMZSD, MMZDD, (W. S.) B, FBS, FZS, MBS, MZS, MMZSS, MMZDS
6. ナーイ	「子」	C, BC, FBCC, FZCC, MBCC, CC, ZCC, WZC, WBC, HBC, HZC
7. ファツゥ	「甥」ないし「姪」	ZC, MZDC, MMZDDC
8. コウル	「義兄弟」	(M. S.) WB, WMZS
9. ケース	「義姉妹」	(W. S.) HZ, HMZD
10. プゥヌゥ	「妻」ないし「夫」	(M. S.) W, WZ, WMZD, BW (W. S.) H, HB, HMZS, ZH

註) 略号はつぎのとおりである。

F = Father, M = Mother, B = Brother, Z = Sister, S = Son, D = Daughter,  
C = Child, H = Husband, W = Wife, M. S. = Man Speaking, W. S. = Woman  
Speaking, el = elder, yo = younger

イ、プウイー、ムウエギャン、ナーイ、ファツウの七つの名称で類別される。

(二) 自己より上の世代では、男性はサムム、女性はイーンの名前で示されるが、母系クランの男性だけは、ツクファイの名称で指示される。すなわち、父、父の兄弟、父の父、母の父はすべてサムム、母、母や父の姉妹、母や父の母はすべてイーンである。それにたいし、母の兄弟、母の母の兄弟はツクファイである。

(三) 自己の世代では、名称は話者と相手との性によって区別される。話者と同性の相手にはプウイー、異性のそれにはムウエギャンの名称がもちいられる。すなわち、自分が男なら兄弟と同性のイトコはプウイー、姉妹と異性のイトコはムウエギャンである。

(四) 自己より下の世代では、同一クランの女性の子以外は、すべてナーイの名称があてられる。自己が男性の場合のみ同一クランの女性の子は、ファツウの名称で示される。すなわち、自分の子ども、兄弟の子ども、同性のイトコの子どもはナーイである。

右のことから、サタワルの親族名称は「父」と「母」の名称を自己の親の世代の親族（母の男性キョウダイは除外）に、キョウダイ名称を自己の世代のすべての親族に、そして子ども（<sup>1</sup>）の名称を自己の子どもの世代の親族（姉妹の子どもと彼女の同性キョウダイの<sup>1</sup>コは除外）に、それぞれ適用する体系である。このような名称体系は、自己の兄弟姉妹の名称とイトコ名称とを区別しない点で、基本的枠組においてハワイ型ないし世代型とみなせる。<sup>2</sup>しかし、母の兄弟と姉妹の子どもの系を強調し、母の兄弟と父の兄弟を異なる名称で、また兄弟の子どもと姉妹の子どもを別の名称で指示することから、その名称体系は、特定の系を区別する「変形ハワイ型」名称体系と規定できよう。

サタワルの親族名称体系を全体的にながめると、話者の性に関係なく自己より上位世代の母系出自集團（リニージおよびクラン）のすべての男性成員は、チチとは区別されている。また、それと対称的に、自己（男性）より下の世代のクランのすべての成員は、子の名称では指示されない点も大きな特徴である。つまり、母の兄弟、母の母の兄弟、母の母の姉妹の息子などは「老人」を意味するツクファイで指しされ、姉妹の子ども、姉妹の娘の子どもなどは、「たまご」の意味のファツウで表わされる。母系の系のなかでも、とくに母の兄弟と姉妹の子どもとが強調されているという点は、親族名称を単に系譜関係の表現としてでなく、個人が他者を類別するカテゴリー語彙<sup>3</sup>と位置づけてみると、それら二者のあいだに特殊な行動規範が設定されていることを予測できる。

#### 姻族名称

自己の婚姻によって生ずる姻族との関係名称を図14、図15、表4を参考にして述べてみよう。自己と姻族関係者を指示する名称には二つのタイプがある。

第一のタイプは、自己を配偶者の位置におき、配偶者がその親族関係者をさす名称をそのままあてる方法である。これは、おもに自己の配偶者より上位世代者と下位世代者をさすときにもちいられる。配偶者の父や母の父、配偶者の父の兄弟や母の姉妹の夫などはすべてチチの名称があてられ、配偶者のハハはすべて自己にとってもハハである。また、下位世代者にたいしては、配偶者の同世代の親族（プーイー、ムウエギャン）の子は、自己にとっても子（ナーイ）になる。たとえば、妻の兄弟や姉妹の子ども、妻の姉妹の娘の夫などである。

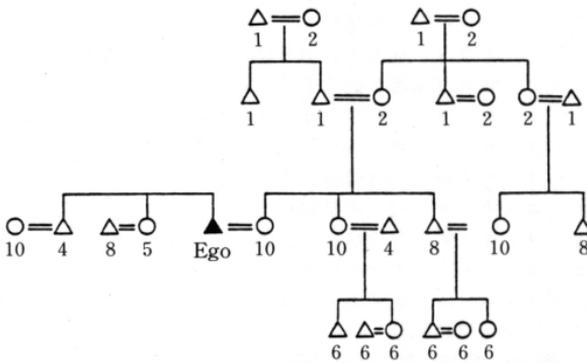


図 14 姻族関係図 (Ego : 男性)

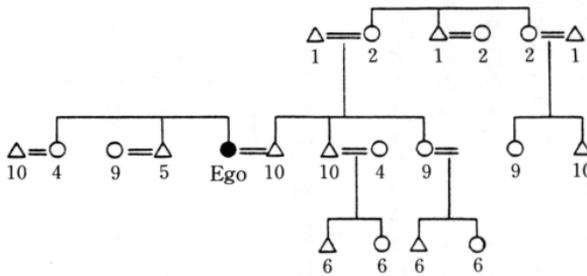


図 15 姻族関係図 (Ego : 女性)

第二のタイプは、姻族関係者をさすとき、親族名称とは異なる関係名称をもちいる方法である。これにはつぎの三とおりがある。

(一) 自己の配偶者は、プヌウの名称で指示される。このカテゴリーには、配偶者の同性キョウダイがふくまれ、たとえば男性からみると、妻の姉妹、妻の母の姉妹の娘などである。

(二) 自己が男性の場合、その妻の異性キョウダイは、コウルの名称で指示される。たとえば、妻の兄弟、妻の母の姉妹の息子などである。

(三) 自己が女性の場合、その夫の異性キョウダイは、ケースの名称で指示される。たとえば、夫の姉妹、夫の母の姉妹の娘などである。

この姻族名称で注目されるのは、自己の配偶者と配偶者の同性キョウダイとを区別しない点で、それは自己と配偶者の同性キョウダイ（プウイ）との性関係が潜在的に許されていることを示すものである。

- エピン (禁忌)
- 1 エピン・メ・ウォーン (表敬行為)
    - 1) カパセ・アワーワ (敬語)
    - 2) エピン・アガタ・ウォーン (身体上部の接触の禁忌)
    - 3) アップウオロ (頭部を低くする行為)
  - 2 ピニン・ムウエギャン (異性キョウダイ間の禁忌)
    - 1) エピヌ・ウーン (食器共用の禁忌)
    - 2) エピヌ・ワイソル (携帯物共用の禁忌)
    - 3) エピヌ・セパオ (同席の禁忌)
    - 4) エピヌ・キエキイ (寝具接触の禁忌)
    - 5) エピヌ・マガク (衣服接触の禁忌)
    - 6) エピヌ・マック (陰部のイレズミ露出の禁忌)
  - 3 カパセ・ピン (禁忌語)

図 16 禁忌行動の民俗分類

### 禁忌事項の種類

サタワル社会には、個人が他者と接触するさいに、制度的に規定された行動規範がある。それはエピンとよばれる。エピンは禁忌事項一般をさす総称で、「仕事の禁止」、「聖域に入ることの禁止」のように、禁忌とされる事項の内容によってカテゴリーが細分されている。サタワルの人びとは、対人関係におけるエピンを図 16 のように分類している。

エピン・メ・ウォーンは、直訳すると「上からの禁忌」の意味であるが、含意は「目上の人よりも自分を高い位置においてはならない」という行為を表わす。つまり、「表敬行為」である。ピニン・ムウエギャンは「異性キョウダイ間の禁忌」で、自分と同世代の親族や姻族とのあいだでの規範である。そして、カパセ・ピンは「話すことの禁忌」の意味で、おもに男女間の「禁忌語」をさす。これらの禁忌事項は、「一人前の男」や「一人前の女」に義務づけられる。

### 敬語

カパセ・アワーワは「話す」とか「ことば」を示すカパスと、「敬う」とか「尊敬」を表わすアワーワとの合成語である。直訳すれば、「敬って話す」とか「尊敬のことば」という意味になる。ここでは、「敬語」の訳をあてることにする。敬語には動詞と名詞の二種類ある(表5、表6参照)。動詞では、「食べる」、「飲む」、「聞く」、「見る」、「話す」、「知る」、「かぐ」、「なめる」などがあげられている。これらの語彙は、視覚、聴覚、味覚、嗅覚などに関連しており、いずれも人間の感覚や知覚を表現する動詞である。ほかに、「立つ」、「笑う」、「寝る」、「死ぬ」など人間の動作や死に関連する動詞もふくまれる。名詞では、「頭」、「額」、「目」、「鼻」、「首」、「口」、「耳」などがある。それらは身体の部位名称で、いずれも人間の身体のうち首より上の部位を示している。

それらの語彙の敬語には、表5と表6からもうかがえるように、非敬語と同じ意味の語と、その原意とは異なった意味をもつ語彙とがある。後者の転用された語彙では、食べるの敬語として「使う」、「分配する」、「分ける」が、なめるの敬語に「試す」、死ぬのそれには「視界から見えなくなる」とか、「おかくれになる」ことを意味する動詞が、それぞれもちいられる。一方、見るの敬語には、「背中」、「足の外側」、「足の指の外側」、話すの敬語の一つに「足の下」があるなど、名詞が動詞として代用されている。たとえば、兄に「魚を見てください」という場合に、敬語を使うと「魚を足の下(して)ください」と体言止めのかたちで言う。「見る」や「話す」の敬語に「足」をあてることについて、サタワルの人びとは、自分より地位の高い人から話を聞くとときや彼に話しかけるときには、相手の目を見てはならず、自分の視線をいつも相手の足もとに向けなければならないからだと説明する。相手の目を見ることは、彼の言うことに従わないことを示すことになるからである。この説明は、サタワル社会における

表 5 動詞の敬語

	非 敬 語	敬 語
1.	mwongo (食べる)	1. wiis
2.	yúún (飲む, すう)	2. yááyá (使う) 3. yinetúúk (配分する) 4. yóttóówur 5. teep 6. núúnú 7. tacchúúk 8. pattúúk (分ける)
3.	rongorong (聞く)	1. pworóówus 2. pwoppworó
4.	piipi (見る) (weri)	1. sakúruúw (名詞形で, 背中) 2. núkún pirey (名詞形で, 足の外側) 3. núkúniipwa (名詞形で, 足の指の外側) 4. sarey 5. woori
5.	kkepas (話す)	1. yóónák 2. yóno 3. fáániipwa (名詞形で, 足の下)
6.	kúneeey (知る)	1. reepiya
7.	téngú (かぐ)	1. ngúuri
8.	yúútá (立つ)	1. nnangetá 2. yússútá
9.	kekkáy (笑う)	1. faiwár 2. riyáák 3. ffas
10.	tumwuri (なめる)	1. yákina (ためす) 2. sótoni (ためす) 3. nnári 4. woongi
11.	mayúr (寝る)	1. sáypár (目をつむる) 2. yatén 3. kúnamw (まどろむ)
12.	máánó (死ぬ)	1. wosónó (見えなくなる) 2. púngúnó (かくれる)

註) 敬語のうち, 非敬語の語意と異なる語にかぎって意味を書き入れた。それ以外は, 非敬語と同じ意味の敬語である。

## 7 社会的規範と行動

表6 名詞の敬語

	非敬語	敬語
1.	riimw (頭)	weyinand (天, 空)
2.	móong (額)	weyínáng ( " )
3.	yánni riimw (頭髮)	1. yúún 2. yánni weyínáng
4.	neyáyin fatún (眉間)	weyínáng (天, 空)
5.	maas (顔)	sapwéyún
6.	fayúnn maas (眼)	fayúy sapwéyún
7.	pwoot (鼻)	yófóng
8.	yaaw (口)	ngáár
9.	yúúw (首)	sórof
10.	fáán yúúw (のど)	yósórofan
11.	sáning (耳)	pworówus
12.	faat (眉毛)	nóngoi táyúk (ウコンの支え)
13.	mátetteren maas (まつ毛)	mátetterey sapwéyún
14.	sópwón maas (目じり)	sópwoy sapwéyún
15.	ránni maas (涙)	ranni sapwéyún
16.	yówusap (ほお)	wóói sapwéyún
17.	meren pwoot (鼻の先)	meren yófóng
18.	ngii (齒)	fótófót (植えること) faay (石)
19.	chéchónon maas (瞳)	chéchónon sapwéyún
20.	réen kánew (舌)	réeni ngáár (口の葉)

表敬行動の性質の一面を端的に物語っている。

名詞の敬語にも、意味の異なる非敬語の語彙を転用する場合がある。たとえば、「頭」の敬語は「天」とか「空」を意味するウェイ・ナンである。それは頭だけでなく、「額」、「眉間」をもさす敬語である。相手がウェイ・ナンで何を指示しているかは、文脈で判断する。また、「眉毛」の敬語には、「支え」と「ウコン」を表わす二語からなるノゴイ・タククが使用される。これは、人びとが魔除けのためにウコン粉を額に塗るとき、眉毛がそれを支えているとみなしていることによる。いずれにせよ、自分より地位の高い人の

「頭」、「額」、「眉毛」をさす敬語に、「天」、「上方」などを指示する語彙をあてて、「天に近いところのもの」を意味している点も興味深い。しかし、敬語のすべてが、通常の語彙とは異なった意味を示す語彙で代用されているわけではない。「食べる」の敬語には、「召しあがる」という意味のウィース、アッタウル、テープ、ヌウーヌウが、「見る」のそれには、「よく見る」とか「理解する」というの意味のサレイ、ウォーリがそれぞれもちいられている。

### 身体上部への接触の禁忌

エピン・アガタ・ウォーンは、直訳すると「上に触れることの禁忌」で、「ある人の身体上部位、とくにみぞおちより上の部分にさわってはならない」という禁忌である。これは日常的な生活だけでなく、儀礼の場面でも守らなければならない。サタワルの人びとは、みぞおちを「魂の前」で命があるところ、肩は邪術を払いのける力のあるところ、口と舌は悪霊や嵐にたいし強い呪文を吐くところ、眉間はもろもろの知識を記憶しているところと考えている。つまり、それらの個所はサタワルの人びとにとって人間の生命や呪術的力と関連する重要な身体部位なのである。

男性がカヌーで航海に出かけるとき、女性は航海の安全を祈願して呪文を唱えながら、旅だつ夫や息子、クランの男性成員のみぞおち、肩、口、舌、眉見などにウコン粉を塗る儀礼を浜辺で行う。そのよくな個所に触れることには禁忌がともなっている。とくに、女性が男性キョウダイ（ムウエギャン）の身体にウコンを塗ることはきつく禁じられている。彼女たちは兄弟の無事の航海を祈りながらも、その

儀礼にはくわわらず、砂浜の離れたところにすわって見送るだけである。

踊りのさいに、女性は頭飾りや首輪を多くつくるが、それらを男性キョウダイの頭にかけることも禁じられる。男性が死んだときでさえも彼の女性キョウダイはその死体の頭髪を整えたり、顔を水で洗ったりすることが禁忌になる。他方、男性は兄や母の兄弟（ツクファイ）の頭部に触れることを禁止されるし、彼らが病気になるたときでも、彼らの上半身をマッサージ治療することができない。

### 頭を低くする行為

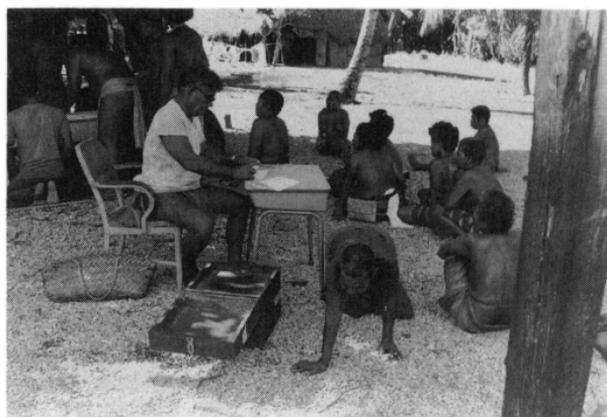
アップウオロの語意は、「腰を曲げる」とか「身体をかかめる」である。これは個人がある人の前では相手よりも一段と低い姿勢をとらなければならないという禁忌である。女性は、ムウエギャン（男性キョウダイ）を見かけたり、彼のそばを通るときには、彼のとっている姿勢よりも低いかまえをしなければならぬ。男性が立っていれば腰をかかめるだけでよいが、彼がすわっている場合には、すわるよりも低い姿勢、すなわち四つん這いになって彼の前を通りすぎる。男性の姿が見えなくても、彼がいると思われる場所（たとえば彼の家）にさしかかると、まず彼の名前をよんで彼の存在を確かめる。兄弟がいれば、立ち上がってもらってから、女性は腰をかかめて歩いてゆく。

このような行動規範は、日常生活の対面行動に限らず、居住様式や労働慣行にも反映する。独身男性、妻と離婚や死別して自分のプウコスに帰った男性は、女性キョウダイの家に同居したり、そのそばに家を建てて住むことはできない。男キョウダイが寝ているときには、その家の周囲で彼女たちは動くこと

ができないからである。実際には、未婚ないし出もどりの男性は海岸に建っている集会所兼カー収納庫を寝所にするか、自分の屋敷から遠く離れたところに家を建てて住む。最近では、女性キョウダイの家のそばに家を建てる独身男性もいる。しかし、伝統的家屋が土間形式であるのにたいし、その家の構造は高床形式である。高床形式の家にするのは、その家で男性キョウダイが寝ていても、女性キョウダイは腰をかかめるだけでよいからである。これは、アップウオロが相手より低い姿勢をとらなくても、相手よりも空間的に低ければよいことを示唆している。

この規範は男女がヤシ林でコプラづくりやパン果の採集を共同で行う仕事でも守られる。異性キョウダイは、相互に相手の動作に気を配って仕事をする。女性がヤシの実や地面に落ちたパン果を集めるときには、男性キョウダイに立つてもらってから作業を始めなければならない。また、それらの実をかごに入れて運ぶさいに、男性キョウダイがすわって仕事をしなければ、仕事を中断して立ち上がってもらってからその前を通る。この規範があるために、異性キョウダイが同じ仕事をすることは極力避けるように心がけられる。

アップウオロの行動規範は、異性キョウダイ間でとくに厳しく規定されている。ただし、同性間でも簡単なアップウオロが要求される。男性の場合は、彼の兄や母方オジの前を通るときには、頭を低くしなければならぬ。自分の妻の兄弟の前でも同様な姿勢をとる。しかし、男性間でのその行為は女性が男性キョウダイにたいするようには厳格でなく、「少し姿勢を低くする」だけでよい。いずれにせよ、このアップウオロの行動様式が要求される対人関係のカテゴリーは、女性にとって異性のキョウダイが基本となる。



すわっている弟の前を這う女性

われわれの目には、女性が男性キョウダイの前でイモムシのように這いつくばる光景は異様に映る。この行動規範について女性は、「女はつねに男キョウダイの下にいななければならない」とか、「女は男キョウダイを偉くしなければならぬ」と、こともなげに説明するのである。これは、同世代者間では男性が女性より高い地位にあり、「偉い存在」であるということだとも考えられる。アップウオロにしる、まえてみた敬語、身体接触にしる、サタワルの表敬行動は、二者間の地位関係を空間の上下関係によって表現する点に特徴がある。

### 異性キョウダイの禁忌

異性のキョウダイ関係にある人びとのあいだには、アップウオロのほかにも多くの禁忌がある。

#### 「食器」共用の禁忌

エピヌ・ウーンのウーンは「飲む」、「すう」を意味する。この禁忌は女性キョウダイが男性キョウダイの使った食器類や調理用具に触れてはならないというものである。彼女は男性キョウダイが一度でも口をつけた容器に触れることを永久に禁じられる。皿、コップ、スプーンや鍋などがその対象物になる。また、直接に口

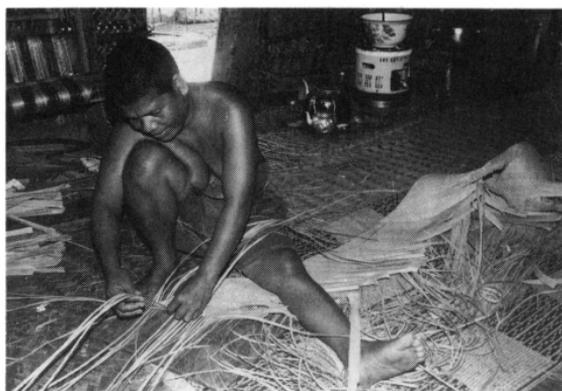
をつけなくても男性キョウダイが口に含んだものを出しただけでも、その皿や鍋は女性キョウダイにとつて禁忌になる。男性キョウダイがすいかけたタバコを彼女がすうことも禁じられている。しかし、それらの逆、すなわち男性キョウダイが彼の女性キョウダイの口に触れた食器類やタバコなどを使用した、のんだりすることは禁忌ではない。男性のなかには、姉が買ったばかりの皿で食事をし、その皿を自分のものにするという意地の悪いものもいる。この禁忌はムウエギャンのカテゴリーにある男女間で、女性キョウダイが男性キョウダイに一方向的に行う行為である。

#### 「持ちもの」共用の禁忌

サタワルの男性は、いつもヤシのカゴを脇にかかえて持ちまわる。その中には、菓子類、現金、ナイフ、タバコ、釣り針などあらゆる小物が入っている。女性キョウダイが、男性キョウダイのカゴの中に手をいれて物を取り出したり、そのなかの食物を食べたりすることは厳しい禁忌である。また、男性キョウダイが使った頭飾り、首飾りを女性キョウダイが身につけることも禁忌の対象とされる。それに、男性の禪にはさんであるタバコを彼の女性キョウダイがすうことも禁じられる。ワイソルは物を「つまみあげる」という意味の動詞であり、エピヌ・ワイソルは女性キョウダイが男性キョウダイの持ちものを使用することを禁止する規範である。

#### 同席の禁忌

エピヌ・セパオとよばれる禁忌で、セパオは家の中に敷くココヤシの葉で編まれた編み目の荒いマッ



タコノキの葉でマットを編む

トである。土間に直接敷き、寝るときはその上にタコノキの葉で編んだマットをひろげる。この禁忌は異性キョウダイが敷物の上、つまり同じ家に入っていることを禁止し、とくに女性キョウダイが男性キョウダイのいる家に入ってはならないという規範である。男が病気になるたときでも、女性は男性キョウダイの家の中へ入ることを避け、家の入り口にすわって見舞う。男性キョウダイの臨終のさいに彼の家やカヌー小屋で寝るときでも、女性キョウダイは彼からもっとも離れたところで寝なければならない。そのときでも、男性キョウダイとの間に丸太か柱が置かれる。

#### 寝具接触の禁忌

キエキイは、タコノキの葉を裂いて編んだマットである。この禁忌は女性キョウダイが男性キョウダイの寝具類に直接触れてはならないという規範である。サワフルの人びとが使用する寝具は、そのマットと枕、掛け布、蚊張である。日中、枕や掛け布は、キエキイのなかにたたまれて家のなかに置かれる。男性が他島へ出かけるさいには、寝具をそれにくるんで持参する。この禁忌は、寝具が家のなかにあるときだけでなく外へ持ち運ばれたときでも、それへの接触を禁じている。もし、女性キョウダイが男性キョウダイの掛け布を運ばなければならないときは、棒の先にひっかけて、直接手に触れないようにする。

## 腰布の禁忌

エビヌ・マガクとよばれる禁忌である。マガクは布を意味するが、本来はツールとよばれる腰布である。ツールはバナナやハイビスカスからとりだした繊維を地機で織った細長い布である。この禁忌は女性が身につけていない腰布を男性キョウダイの目にふれさせてはならないという規範である。使用しない腰布をしまう場所は、家の裏側の軒びさしの下と決っている。それを掛ける場所は女の領域で、男性が近づいてはならない区域になっている。女性は洗濯後の腰布を家の中に干すことはできず、軒びさしの下に掛けて乾燥させなければならない。また、異性キョウダイ間で相手の腰につけている布（男性の場合は褌、女性の場合は腰布）や衣類に直接触れることも禁忌とされている。

## イレズミの禁忌

男性は女性が彼女の太腿にほどこしたイレズミを見ただけで興奮するという。この禁忌は女性キョウダイが男性キョウダイにそのイレズミを見せてはならないというものである。サタワルの女性は、「一人前の女」になるとイレズミを手首や太腿に彫りこむことが習慣とされていた。現在でも、五十歳以上の女性はほとんどイレズミをしている。イレズミがある太腿の部分は腰布で隠されており、普段は見ることはできない。女性が海や池で水浴をするときにも腰布を脱がずに身体を洗う。着がえるのは前述した家の特定場所においてである。イレズミを見るということは、腰布をとることであり、性的営みの場面に限定される。

異性キョウダイ間の禁忌のなかには、女性だけが男性キョウダイにたいして守らなければならない禁忌もあるが、キョウダイがおたがいに同じものを口にしたり、場を同じくしたり、身にまとうものを共用することを禁止する事項も多い。これは、イレズミを見る禁忌で代表されるように、異性キョウダイ間で性を連想させる行為にたいする禁忌、つまりインセストを避ける行動規範を表現していると解釈できよう。

### 禁忌語

カバセ・ピンは、カバセ・エンガウ（「悪いことば」ともいわれ、男女間で表7にあげたことばを使用することを禁止する規範である。それらの語彙には、人間の生殖器官、排泄行為、性的関係を示すことばが多くふくまれる。

この禁忌は、特定の親族ないし姻族のカテゴリーにある人にたいしてだけでなく、男女間一般に設定された規範でもある。しかし、男性間で地位の異なる人のあいだ、たとえばファツウとツクファイなどであっても、同性間では禁忌語とはならない。「悪いことば」といわれるものの中には、代用語を使用して行為内容を表現することが許される語彙と、絶対にそのことを口にしてはならない性質のものがある。前者は排泄行為を示す語彙である。たとえば、「私は小用に行く」というとき異性の前では、シールを口にできず、代わりにアメヤウと言えよ。

多くの人のまえでたとえ悪いことばを使用したとしても、それを口にした人は「島のきままりをわきま

表7 禁忌語

	語彙	意味	代用語
1	tingiy	女性性器	
2	poranu	恥丘	
3	fir	小陰唇	
4	kumererhun	陰核	
5	pangarawan	陰腔	
6	yanú	陰核龜頭	
7	faichuchun	尿道	
8	kkor	陰毛	
9	se	男性性器	
10	ruumw	龜頭	
11	faiseen	こう丸	
12	kinise	こう丸の外皮	
13	pwuruw	肛門	
14	kkus	性液	
15	ngúfar	月経	
16	fe	性交	
17	irir	自尉 (男性)	
18	yatei	自尉 (女性)	
19	rakurak	交接の動作	
20	yámwar	愛人	
21	yámwesow	男女の密会	
22	rapiy taan	(女性の) 太股	
23	paa	大便	fannikat
24	siir	小便	yameyow
25	mesaik	気持ち良い	kker

為に関することばは避けなければならない。「おまえの姉の陰核が小さい」、「妹の性器をなめろ」とか「姉妹(女性キョウダイ)や母(ハハ)を犯せ」といった表現は、相手を侮蔑するもつとも悪い罵倒表現と考えられている。そのようなことばが発せられると、3章で述べたように男性間では言った相手を殺傷したり、女性間では言った相手を打ち負かすことが認められている。

えない人」だと言われるだけである。老人(男性)が若い娘のまえで「海岸へ大便(ペア)をしに行く」と平気で言う。長老はその種のことばを口にして、「冗談を言って笑わせる人」とみなされる。それにたいし、異性の前で口にすることを禁じられることばは、生殖器官の名称である。とりわけ、相手の異性キョウダイやハハの性器と性行

サワル社会では、禁忌事項を遵守しなかった当事者にたいする制裁が規定されている。この制裁は大きく二種類に分けることができる。一つは社会的制裁で、もう一つは宗教的制裁である。

社会的制裁は、禁忌事項を守らなかった人に肉体的苦痛をあたえることである。女性が兄の前でアツプウオロをしなかった場合、兄は彼女を叩く。これはニイノとよばれ、「打ちのめして死にいたらしめる」という意味の制裁である。それは表敬行為や異性キョウダイの禁忌の行動規範を遵守しなかった人にもかならずなされる。人びとはこの種の「まちがい」を極度に嫌っており、もし起きたら、母系クランにとってたいへん「恥ずかしいこと」だという。そのような事態が生じることを避けるために、親子ともに小さいころから禁忌のことを教えこまなければならぬと強調する。

宗教的制裁というのは、超自然的存在によってなされる「罰」である。これはリヤとよばれる観念と結びついている。リヤは禁忌事項を守らなかった本人だけでなく、相手や両者のクラン成員に、後日超自然的な力によって何らかの危害をもたらすという観念である。たとえば、AがBに敬語使用の義務があるのに、守らなかったとき、その結果としてAかBに病気やけが、もっと悪いときには死などが「懲罰」としてふりかかるのである。また、あるクランの成員が原因不明の急病にかかったりした場合、その病因の一つにこの種の禁忌事項の不履行があげられる。超自然的な制裁は、「祖霊」によってもたらされると信じられている。

この制裁の特徴は、禁忌事項を破った本人だけでなく、犯された相手やそれらのクラン成員にも超自然的な力つまり祖霊によってある種の「災い」がおよぶという点である。禁忌事項の不履行によってもたらされる異常な現象は、リヤのせいだとしてとらえられる。リヤの観念は、禁忌事項の侵犯にかぎら

ず、社会関係や社会秩序を乱すこと、前でみた婚姻の不履行や禁忌区域への侵入などによってひき起こされる「望まざる事態」すべてに適用される（5章）。いずれにせよ、対人関係において宗教的制裁をもともなった禁忌事項が規定されている点に、サワル社会の行動規範の厳格な性質が表われているとみなせよう。

### 忌避行動と親族カテゴリー

社会人類学の親族研究の分野においては、ある社会の人びとの行動様式を「冗談関係」と「忌避関係」という二つの対立概念で把握する方法論がある。「冗談関係」は、「ある特定の関係にある人びとのあいだで一方が他方をからかったり、中傷したりすることが許容され、ときには要求されており、他方はそれにたいして立腹しないような二者間の関係」と定義されている。<sup>(4)</sup>これは社会的規範として通常禁じられている性的表現や呪いのことばなどで相手を悪罵したり、相手の持ちものを無断で借用したりしても、相手は気を悪くせず、逆にその行為を好意や親しみの表現としてうけとめるような行動様式である。それにたいし、「忌避」は相手に社会的距離をおいて接したり、尊敬することを義務づける二者間の関係をさす。<sup>(5)</sup>

このような行動様式は、程度の差はあれ多くの社会で見いだされる。早くからこの分野の研究が進められてきたアフリカ社会においては、忌避行動が観察される社会には冗談行動もみられると指摘された。<sup>(6)</sup>そして、「冗談」と「忌避」を表わすカテゴリーが存在することも論じられている。それらのカ

テゴリーは、対人関係において冗談を言い、ふざけてもよい関係者（オイと母方オジ、孫と祖父母、同性の年齢組仲間など）と、尊敬し避けあう関係者（父と息子、夫と義理の母など）とを類別する基本的な行動基準になっている。<sup>(7)</sup>ここでは、サタワル社会の対人関係にみられる行動規範、とりわけ「表敬行為」と「異性キョウダイの禁忌」の行動様式が、それらの概念との関連でどのように位置づけられるかを検討することにしよう。

#### 禁忌事項の対象者

サタワル社会の対人関係にみられる忌避事項は、表敬行為が自分より地位の高い人にたいする尊敬行動を、異性キョウダイの禁忌が異性キョウダイ間で距離を置いて接する方法をそれぞれ規定している。表敬行為や距離をおく接しかたを要求される親族・姻族関係者の範囲はそれぞれ異なっている。まず、表敬行為のうち敬語の使用が義務づけられ、身体上部位への接触が禁止される二者の人間関係をとりあげる。

それらの禁忌事項を遵守する人間関係は、男性か女性か、年長者か年少者か、上位世代者か下位世代者か、クラン成員か非成員か、親族か姻族か、という五つの要素で決定される。具体的対人関係では、その五つの要素がさまざまにくみあわさって忌避をめぐる態度で表現される。それらの行動規範を遵守する二者関係について図13、図14、図15と表4を参考にして述べることにしよう。敬語の適用と身体上部位への接触の禁忌の原則は、男性ならつぎのとおりである。

(一) 上の世代では、ツクファイのカテゴリにある男性、つまり同一クランの上位世代のすべての

男性、父より年長の男性キョウダイと彼らの妻たちである。たとえば、母や母の母の男性キョウダイ、母の母の男性キョウダイの息子、父の兄などと彼らの妻たちである。

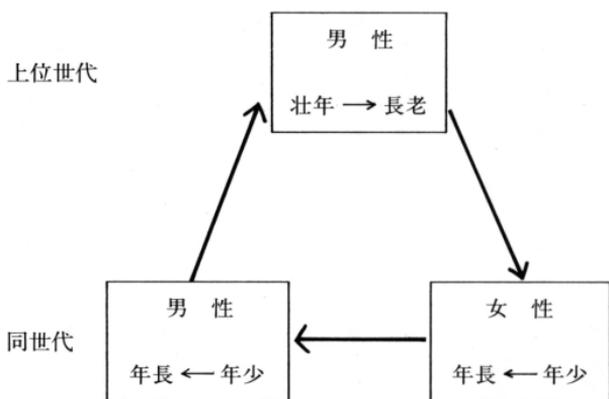
(二) 同世代では、同じクラン成員でプウイーのカテゴリにある年長キョウダイ、ツクファイの息子(男性のアファクル)、父より相対年齢が上の男性キョウダイの息子と彼らの妻たちである。たとえば、兄、母の姉の息子、母の兄弟の息子、父の兄の息子と彼らの妻たちである。

(三) 姻族では、コウルのカテゴリにある男性と彼の妻、および自己の妻より相対的年齢が上の妻の同性キョウダイの夫である。たとえば、妻の兄弟とその妻、妻の姉の夫などである。

(四) 「老人」の段階に達した男性にとっては(表1参照)、彼の女性キョウダイの娘(クランの下位世代の女性成員、つまり女性のファツウ)と彼女の夫たちである。

女性の場合、それらの行動規範が義務づけられるのは、同世代の親族と姻族に限定される。女性はムウエギャンのカテゴリにある同一クランの男性成員、母の男性キョウダイの息子と父の年長キョウダイの息子などの男性と彼らの妻たち、それにプウイーのカテゴリにある相対年齢が上の女性、ツクファイの娘(女性のアファクル)およびそれらの夫たちである。たとえば、兄弟、母の兄弟や父の兄の子どもなどである。

右の原則から、敬語使用と身体上部位への接触禁忌の規範は、同一クラン成員で同世代の二者間においては、女性が男性に、年少者が年長者にたいして義務づけられる性質のものであることがわかる。同一クラン成員だが異世代間では、下位世代の男性は上位世代の男性に、そして上位世代の男性は、一定の年齢(長老)階層になると下位世代の女性にたいして遵守する。その理由として、長老は「女のファ



註 年長・年少，壮年・長老のあいだの表敬行動は，同一世代者の年齢だけでなく，上位世代者(父・母)の出生順にもとづいて行われる。

図17 クラン成員間の表敬行動

ツウがアイナンのラピン(根幹)になるから」と説明する。これは母系クランや母系リニージの存続の要となる女性にたいする敬意を表わしているものと解釈できる。

ここで注目されるのは、同一クランの成員間においては特定の個人に表敬行動が集中しないことである。いいかえれば、同じクラン成員のあいだでの規範の遵守が、同世代間では女性が男性に、異世代間で男性が男性に、そして長老の域に入った男性が女性にとりうふうに、三すくみの関係になっていることである(図17)。また、姻族とのあいだでの敬語使用

や表敬行動の遵守は、配偶者相互が同格の地位になり、妻ないし夫と相手との関係にもとづいて決定される点である。

つぎに、頭を相手より低くするアツプウオロの規範と、「異性キョウダイ間の禁忌」についてみると、それらはすでに述べたように、同世代の異性キョウダイ間に規定された禁忌行動である。アツプウオロは女性キョウダイが男性キョウダイに一方的に行うものであり、異性キョウダイ間の禁忌は一方的な行為と双方的行為の両方がある。最後の「禁忌語」の抑制の行動規範は、基本的には男女間で相互に守るべき性格のものである。

## 忌避行動としての禁忌

サタワル社会における表敬行動と禁忌行動は、二者間の直接的な接触を回避し、一定の距離を置いて接する行為であることから、「忌避」の概念を適用することができよう。「忌避」の対概念としての「冗談」に関しては、サタワル社会においては「悪いことば」をあびせて相手を罵倒するような行為を許容したり、またそうすることを積極的に要求するような行動規範はない。ただ、二者間の関係で「遠慮をする必要がない」とか「気がおけない」という種類の親密さを保てる間柄は、個人とその父や父の男性キョウダイのあいだでみられる。たとえば、船大工である父の弟がカヌー完成式のときに、依頼主から謝礼してもらおう多くの米、布、カンツメやバケツなどの一部を、彼の兄弟の子どもが奪いとることができる。また、男性は父のリニージのカヌーを自由に使ったり、ココヤシの実を無断で採取したりすることが許されている。

そのような関係は父と息子のあいだでもみられる。息子が父の持ちもの（釣り針やタバコなど）を無断で取っても父は息子を叱ったりしない。それには、母の兄弟の所持物を勝手に使うときつく罰せられる。また、母の兄弟が釣り針やタバコなどを要求した場合には断われないが、父の兄弟がそれらを欲しがったとしても無視できる。このように、母の男性キョウダイにくらべ、自分と父や父の男性キョウダイ（リニージ成員）との「気やすい」関係は、冗談関係とみなすこともできよう。けれども、この種の行動様式は物を盗んだり、要求したりすることが積極的に許容されているとはいいがたい。対人関係において、どちらの関係がより「気やすい」かを相対的に表現しているにすぎないともいえる。

人間関係における行動様式を、「忌避」と「冗談」との両極において、サタワルの人びとの行動様式

をみると、それは忌避の極に集中していることを特徴としている。<sup>(8)</sup>つまり、表敬行為と異性キョウダイの禁忌に代表されるように、この社会の行動様式は極度の「忌避」を特徴とする性格と位置づけることができる。

#### 禁忌行動の比較

忌避関係についてのこれまでの研究成果によると、相互に顔を合わせることも避けなければならぬような極端な関係は、アフリカ社会では男性と彼の妻の両親（妻の母ないし父）、すなわち男性と義父母とのあいだで顕著にみられることが指摘されてきた。<sup>(9)</sup>しかし、ポリネシアやマイクロネシアなどのオセアニア社会においてはそれらのあいだでの忌避関係が報告されていない。<sup>(10)</sup>

トンガ諸島では、子どもと父の姉妹とのあいだにほかの関係者よりも厳格な行動規範が規定されている。子どもにとって彼女の身体、食物、衣類、ベッドに触れることや、彼女の死体が置かれている部屋へ入ることがタブ（タブー）である。兄弟姉妹間では、十歳をすぎると相互に裸体を見せること、衣類、ベッド、シーツに触れること、同じ部屋で同席したり寝たりすること、共食することを禁じられており、お互いに丁寧なことばを使用しなければならない。<sup>(11)</sup>サモアにおいては、異性キョウダイ間での相互の会話、共食、身体接触、相手の所持物の使用などが禁じられている。<sup>(12)</sup>サモアと同様、サタワルにかぎらずマイクロネシア社会においても、隣接世代間の親族関係者のあいだより、同世代の異性キョウダイ間での性的表現に関する言動の回避などの忌避行動がとくに強調される。<sup>(13)</sup>

けれども、それらの社会における忌避行動の内容は、異性キョウダイが相互に遵守すべき性格のもの

である。サタワル社会の同世代者間におけるそれは、女性キョウダイが男性キョウダイにたいして一方的に尊敬行為を行う点で、ほかの社会にくらべきわだった特徴を示している。この一方的尊敬行動は表敬行為に典型的にみられるように、「女はつねに男の下にいななければならない」という觀念にもとづき、相対的な社会的地位の上下関係によって決定される。

他方、異性キョウダイ間の行動規範で、異性キョウダイの禁忌のうち、性的表現に関連する禁忌事項は男女相互が守らなければならない性格のものである。これに関連する忌避行動は、オセアニアの諸社会に共通しており、近親相姦のタブーや婚姻規制と関連している。

#### 人間関係の類別法としての尊敬行為

サタワルの人びとは、女性が男性キョウダイにアップウオロをするのは、「自分と相手とのあいだをはっきりさせるため」とか、「よその人（他島からの人）にこの島の男と女の間関係をわからせるため」であるとも説明する。この説明は、いずれもアップウオロが人間関係を類別するためにはたしている機能について述べている。前者は自分と他者との二者間の関係を認知するための行為であり、後者は二者間の関係を第三者に表示するための方法であることを示唆している。

前者については、たとえばある女性が自分にアップウオロしたから、彼女の父と私の父はキョウダイの関係にあるというように、実際の系譜関係を知らなくてもその行為によって二者間の系譜上の位置を確認できる。これは若い男性が老女との系譜関係を知らないのに、彼女からアップウオロされたような場合に起こる。サタワル社会で系譜についての知識は母から娘へと教えられるために、男性は意外なほ

ど、自分のリニージの祖先の名前をはじめ、父方の親族との系譜的關係を知らない。父方の第二イトコとの系譜關係を確認できない男性も多い。

男性だけでなく、若い女性が異性キョウダイのカテゴリにある長老の男性にアップウオロをしないために、長老を怒らせたりすることがある。その長老は子どもにラピトとよばれる「クランの歴史伝承」を教えていないと彼女の母親（姉妹）を非難する。このように、サタワルの人びとのあいだでは、系譜關係の知識は一樣に共有される性格のものでなく、母から娘へと継承される秘密性の強いものである。したがって、自己と他者との親族關係は、その關係を知っている女性から女性の男性親族とりわけ男性キョウダイへのアップウオロという行動様式によってあきらかにされるのである。二世代間の親族關係者しか区別する親族名称体系をもたないサタワル社会においては、自己と相手との系譜上の位置關係を認知する方法として、このアップウオロが大きな意味をもっているとみなすことができよう。

## 8 贈与・交換の象徴性

あらゆる社会での贈与・交換の過程には、贈る義務、受けとる義務、お返しをする義務、という三つの義務が存在することを見ぬいたのはマルセル・モースである。モースは広範な資料を駆使して、贈与・交換論の基本原理を『贈与論』(二九二五)のなかで論じ、その三義務がどのような経済的、社会的、法的ならびに宗教的な拘束力をもって作動するかをあきらかにした。<sup>(1)</sup>

モースより早く、リチャード・トゥールンヴァルトやマリノウスキーは、メラネシア社会の贈与・交換の特質が「互酬性の原理」にもとづいていることを強調していた。つまり、社会関係の形成、維持、強化ないし対立の解決に、互酬的な贈与・交換の行為が重要な役割をはたしていることの指摘である。<sup>(2)</sup> 贈与・交換の諸現象を互酬性の概念で把握しようとする視点は、それ以降、クロード・レヴィ・ストロース、マーシャル・サリンドズをはじめ多くの研究者によってうけつがれてきた。<sup>(3)</sup>

最近二十年間のメラネシア社会における贈与・交換の調査・研究は、交換および交換対象物にみられる象徴性とその意味の解明へと関心が向けられてきている。具体的には、交換活動や交換物の性質を、男性／女性、生のもの／料理されたもの、野生／栽培、食物／物質財、といった象徴的二項対立によっ

て分類し、秩序づけて交換の本質を把握しようというものである。この象徴論的交換論の視点は、従来の男性中心の互酬性の概念で交換論の枠組みを規定する方法とは異なり、交換過程や交換物の性質の分析をおして男女の役割や交換財の象徴性の意味を追求することである。交換においては、男性と女性とが対等な立場にあり、神話的世界や女性の再生産的能力などの要因を加味したうえで、男性と女性との役割が社会・宇宙論のレベルで統合されることをあきらかにしている。<sup>(4)</sup>

このような視点からの贈与・交換論は、男女の分業によって経済生活が維持されている、資源の乏しい島社会における贈与・交換の性格を把握するのに有効な分析方法になりうる。サタワル社会では男性の産物と女性のそれとがセットで登場し、男女間で交換される場面が多い。そして、贈与・交換を行う単位が家族・親族集団の枠にとどまらず島全体へと発展し、男性対女性という形での交換がなされる。

### 人生儀礼と贈与・交換

サタワル社会で、一人の人間が一生の節目ごとにひとつの社会的地位から別の地位への移行を示す儀礼が行われる機会は、すでに2、4、5章でふれたように誕生、初潮（女性）、航海術修得過程（男性）、結婚そして死である。この社会の通過儀礼で興味ぶかいのは、子どもから大人への変化を象徴的に表現する成人式が女性に限られる点である。男性の場合、女性におけるような内容と手続きにもとづく儀礼は存在しない。男子は「島の男」として必要な生産技術（ココヤシやパンノキの管理・収穫、ココヤシ・ロープの製作、漁労活動など）を、一応体得した段階で、大人の仲間入りをするか否かが判断され

る。

一方、男性が島の男として大人の仲間に入るにもう一つの責務が課せられる。それが大型帆走カヌーを操り他島へ航海したり、無人島へ漁労活動に出かけたりするために必須となる伝統的航海術の知識を身につけることである。その知識の修得は島の男子のすべてに期待されており、「一人前の男」としての評価にかかわる問題である。したがって、ここではそれを通過儀礼のカテゴリーにふくむことにする。

## 誕生儀礼

母親が子どもを産むと島の男たちは、酋長の指示のもとに魚とりに出かけ、その漁獲の一部を産婦に贈る。これはロウ（手網による共同漁）とよばれ、四日間行われる。産婦の家では、魚の贈与にたいして料理した食べもののお返しをする。この調理には産婦のリニージの女性をはじめ、産婦の夫のリニージの女たちも参加する。彼女たちは、ロウのある日の早朝にタロイモ田へ行き、タロイモを掘り起こして一籠ずつ、産婦の炊事小屋へ運び、そこで共同で料理づくりをする。一日に掘られるタロイモの数量は二〇籠にもなる。このさいの料理には、ウオトとよばれるタロイモが優先的に使用される。パンノキの結実期にはその実も利用される。いずれも、直経一メートルもある鍋で煮られるか、地炉で石蒸しにされ、さらに石杵でつられたペースト状の食べものである。

ロウの期間、特定の海域へ出漁する男たちは朝ココヤシの実以外の食事をするのが禁じられているため、午後三時ころに帰漁するときには空腹のきわみにある。男たちは自分たちがとった魚を数匹ずつ



カヌー小屋での男たちの共食

分けまえとしてもらい、カヌー小屋の周辺で焼いて産婦の家から贈られた料理といっしょに食べる。それまで禁漁区であった海域で漁労活動をしたあと、男たちがカヌー小屋で食事をするのをアフィーノ（魚を焼く）という。この場には魚に出なかつた老人（男性）たちも招かれ、カヌー小屋で男たちが共食する。新産婦に贈りアフィーノで食べられる魚は漁獲のごく一部にすぎず、大半は島の人びとに均等分配される。分配は、女性、子ども、男性の順に行われる。漁獲が少なく、男性にあたらなくても男性は苦情をいわない。

このロウという慣行は、新生児の誕生を祝って島の人びとが魚を豊富に食べられることを保証している。酋長の管理のもとに貯えられてきた漁業資源を一度に解放し、消費するからである。他方、このときには産婦のリネージやその夫のリネージからも大量のタロイモないしパンノキの実が集積され、消費される。それらのリネージの女たちは、ロウのために七、八ヶ月前からタロイモ田に一定量のイモを確保するための準備を始める。彼女たちはロウに必要なタロイモの数量を見こして、植えつけやすでに植わっているものの除草、畝あげなどの手入れを入念にする。とくに、夫のリネージでは、ロウのために栽培していたタロイモ田のイモをすべて掘りおこして妻のリネージに贈る。それは、この四日間調理されるタロイモの数量が、通常の食糧に消費されるその

数倍にもよるからである。

### 初潮儀禮

女の子が初月経をむかえると、それまでの衣服であったココヤシの葉で編まれた腰みのを外し、新しい腰布を身につける。腰布を織る技術はすべての女の子が初潮を経験するまでに修得しなければならぬ。サタワル社会で「一人前の女」であるためには、腰布を織る技術を身につけることが不可欠の事項であり、腰布を腰に巻くことがそのあかしとなっているのである。この機会には、彼女と彼女の父のリニージの女たちから腰布が贈られる。かつては、彼女はそれらのなかから、気に入ったものを選んで身につけ、月経小屋へこもった。月経小屋での食糧も父のリニージが支給した。現在では月経小屋へ隔離されず家にとどまっているが、腰布の贈与や初潮後の数日間、女の子に父のリニージから料理された食べものが贈られている。

### 航海術修得儀禮

男の子は十歳ころになると伝統的航海術のほどきをうける。最初の段階は、航海者である父親や母方のオジから諸知識を習うもので、私的伝授の形をとる。この期間は十年も続き、若者は「一人前の男」になってから航海者のもとへ通う。航海者を父や近親者にもつ男子の場合は、自分でとった魚や

ヤシ酒を持参するだけで知識を習うことができる。しかし、親族関係のない長老から航海術を修得する場合には、それらのほかに腰布や手斧などの品物を贈らなければならぬ。この私的伝授は航海術を教える人の好意に依存する性格が強く、知識の修得を志さず若者は長老の意にそうべく、物資の贈与をすることが義務づけられる。若者の資質にもよるが、伝授される知識内容の程度は、贈与物の多寡によって決るともいわれる。このような形態での私的伝授の結果、若者が伝統的航海術に不可欠な知識をひととおり修得したとなると、パヌー（「真の航海者」）の仲間入りをするための段階へと進む。

航海術見習いの若者の親たちは、私的伝授を終了した件を酋長に伝え、公的な航海術認定の機会を設定してもらう。酋長は島にいるもつとも偉大で正統な航海術の継承者である長老か、ないしは他島から来たその資格をもつ航海者に依頼して航海術修得儀礼を催す日を決める。この修得儀礼がポである。ポは儀礼を指すと同時に、「航海術修得者」をも意味する。この儀礼は二〜三年に一度の割合で開催され、平均四人の若者が参加する。それはパンノキが実をつけ、食糧の豊富な七〜八月に行われる。

島の男女は儀礼が実施される前日から準備にとりかかる。男たちは森から薪を集め、夕方に追い込み漁で多くの魚をとる。女たちはイモ田に出かけてタロイモを掘り起こし、海岸から小石を運ぶ。儀礼の当日、早朝から石蒸し料理づくりが始まる。男たちは一つの地炉を掘り魚の石蒸しを分担する。女たちは海岸に二箇所、大きな石蒸しをつくり、大量のイモを調理する。夕方までにその石蒸しを掘り返して、イモをとり出し、石杵でつきあげる。できあがったイモ団子は大型の木鉢につめられる。長径一メートル、短径五十センチメートル、深さ七十センチメートルもある木鉢に盛りあげられたタロイモ料理は、パンノキやバナナの葉でおおわれ、儀礼場となるカヌー小屋の中央に置かれる。その木鉢の周囲には、

さらにタロイモ料理や魚をのせた木皿が二十あまりも並べられる。カヌー小屋のひさしには、儀礼で飲まれる若いココヤシがつるされる。

儀礼のための食べものが用意されると、航海者の地位にある男たち（ポ）と新入会者は、カヌー小屋に集まり、木皿に盛られた料理を食べる。それら以外の人びとは、カヌー小屋への立ち入りが禁止される。女たちや子どもたちは、儀礼食としてもりつけられた残りのタロイモや魚の料理を分配して、各家で食事をする。カヌー小屋の中央に置かれた木鉢の料理は、翌日から四日間続けられる儀礼用の食べものとなる。儀礼の内容は、航海術の公的認定者である長老（師匠）が新入会者に航海術の諸知識を試問することである。洋上での航海中の情景を想定し、不眠不休で師匠からの特訓が続く。すでに航海者と認められている男たちもくわわり、新入会者がまちがった答えをすると口ぎたなくののしったり、囃したてたりする。

ポの儀礼は形式的には四日四晩で終了するが、そのあとも師匠と新入会者がカヌー小屋で寝起きして航海術の伝授が続行される。その期間は三ヶ月におよぶことがある。このカヌー小屋での試験、つまり陸上での特訓をがすむと、新入会者は伝統的航海術の修得者（ポ）とみなされる。それから「真の航海者」になるために洋上での実地試験を試みなければならない。それは体得した知識にもとづいて、自分の指揮のもと先輩の航海者とともに百キロメートル離れた無人島への往復航海に挑むことである。この航海を成功させてはじめて、パヌー（一人前の航海者）と認定される。ポをうけた若者で、実地試験に挑戦するのは一人か二人である。

航海術の公的伝授認定の役をひきうける師匠には、お礼として品物が贈与される。それは腰布で、儀

礼の期間中、木鉢の横に積み上げられる。その数量は、三百〜四百枚にもほぼる。師匠に贈られる腰布は、コウニツ・ポとばれ、「航海術への献納」の意味である。新入会者を出すリニージは師匠へ贈る腰布を八十〜百枚も供出することが義務づけられる。そのさい、若者の父のリニージでも三十枚以上の腰布を贈る。また、新入会者を出してないリニージからも、各家一枚ずつの腰布が贈与される。

航海術修得儀礼で消費される食べものと献納される品物の数量は膨大なものである。それらの供与は儀礼に直接関与しないリニージからもなされている。酋長はすべての家から一ないし二籠のタロイモを供出するように指示する。また、石蒸しにされる魚も島の男たち総出の漁労活動によるし、若いココヤシも男一人あたり八個と決めらる。腰布についても前述したとおりである。ここで注目されるのは、一人の若者を航海者として認定する儀礼が彼の帰属するリニージのことがらにとどまらず、島社会全体の問題へと発展する点である。

ポが島の人びととすべての関心事であるのは、つぎのことと関連している。一つは島の男がかならずこの儀礼をうけなければならないという規範であり、二つめは島の資源の利用や分配の慣行である。前者については、どのリニージでも男子がいるかぎりいつかは当事者になるわけで、そのさいの援助を期待して該当事者がいない儀礼の機会においても、ツプン・モゴ・メ・ピシャック（食べものと品物による貢献）をするという考えにもとづいている。この「ツプウ」ということは、他人が家の屋根替えをするさいに屋根材を贈って手伝い、自分のときにそのお返しをしてもらう慣行にも使用される。その意味内容は、同量・同質の物資や労働力のやりとりにある。したがって、各リニージがポの儀礼に食べものと腰布を供出するのは、長期的にみれば均衡のとれた互酬性が維持されることになる。

後者に關しては、一人前の航海者は無人島や他島への航海で得た食料や物資を、島の人びとに分け与えなければならぬという觀念と關連している。長老はその理由を、「島の人びとがポの儀礼のときに食べものと腰布を出してやったからだ」と言う。人びとは、無人島で捕獲した魚介類をモゴ・ニ・ファヌ（島の食料）として、他島への航海でもちかえった物をアピサ・ニ・ワ（航海者のみやげ）として、それぞれが分配されることを当然のことと考えている。無人島の資源は酋長の監督下におかれていることでもあり、そこから持ち帰った食料はすべての島の人びとに均等分配される。しかし、他島からのみやげは、航海者が交換で得た物資のすべてをふくむものでなく、たばこや干し魚などの品物に限られる。このような島の人びとと航海者との贈与・交換の關係は、航海術修得儀礼のさいになされる「食べものと品物による貢獻」によって規定されていることがうかがえる。つまり、島の人びとはポの儀礼において一枚の腰布を贈与することで、将来航海者が島の外から獲得するであろう物資の一部を、そのお返しとして受けとる権利を確保するのである。

## 婚姻儀礼

伝統的な結婚は、婿方と嫁方とのあいだで食べものの交換が婚姻の成立を公にしていた。まず、婿が嫁の家に移り住む日に、婿方から食べものが嫁方に贈られる。婿のリニージでは、その日の朝から食べ

ものづくりにとりかかる。夕方に、婿のリニージの屋敷に住むすべての人が、一人一皿の食べものを手にして嫁の家へ出かける。贈られる料理は五十皿にもなる。それらの皿は嫁の屋敷の住人とリニージの全成員に分配される。皿にもられた御馳走の贈与は、アウトンノ・プアイ（「手の中味」とよばれる。その翌日には、嫁方のリニージの住人は、贈られた皿に同様な食べものをつめて婿方にお返しする。これはアウタ・ポ（「からのものを満たす」とよばれる。婿方、嫁方から、日を違えて贈られる食べものは、それぞれのリニージの住人によって、別々に食べられるだけで双方が一堂に会して共食することはない。

伝統的な婚姻儀礼が、婿方と嫁方との同量、同質の食物交換で表現され、それ以外に複雑な儀礼過程および財貨の交換を経ないことは注目される。婚資をふくめ、婚姻成立の過程で特定の交換財が贈与・交換されないことは、母系制でかつ妻方居住様式をとるこの社会の特徴とみなすことができよう。従来婚姻および婚資に関する研究成果によると、婚資の意味は集団間で女性を「交換」する場合に、女性の労働力および「生殖能力」に対する代償であるとする見方がなされている。<sup>(5)</sup> その点からすれば、サタル社会の婚姻は、集団間での男性の「交換」であり、女性のそれとは性格を異にする。

### 死をめぐる儀礼

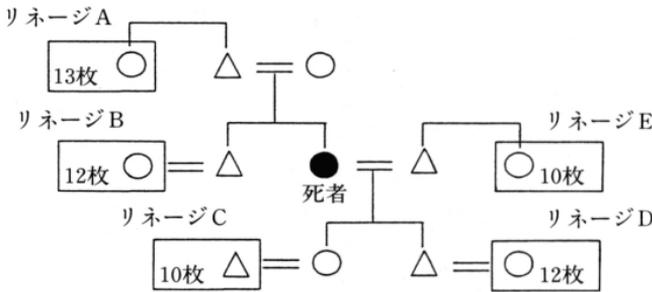
死をめぐる贈与・交換は、死者への弔問、死体の埋葬、供養といった一連の過程で行われる。それらの機会におとらず、病人が出たときにも大規模な贈与・交換がみられる。ここでは、死につらなる病氣

見舞の慣行から死後の供養までの各過程で実施される贈与・交換について述べることにする。

### 病氣見舞

病人の容態が悪化し、死期が近づくと病人のリニージの成員はもちろんのこと、病人の配偶者やその父のリニージの成員、および病人のリニージから婚出した男性成員の子どもたち（アフアクル）が、つきっきりで看病にあたる。他島にいる病人のリニージ成員や親族もカヌーや連絡船でかけつける。これら多くの親族関係者が添い寝をするために、病人はカヌー小屋に移される。病人の出たりニージと屋敷（アウコス）の人びとは、見舞客に食事を支給する。それを補う目的で親族は、ココヤシや食べものを持ち寄る。この贈りものはアンモナル（病人の食べたいものを探す）とよばれる。とくに、アフアクルは二度、三度とココヤシを贈るなど大きな役割をはたす。女たちはタロイモやパンノキの実で食事づくりに専念する。病人の配偶者のリニージやその父のリニージの女たちは、料理された食べものを毎日のように病人のもとへ届ける。彼女たちは、日中は自分の家での仕事をし、夕方に一皿の料理された食べものを持参して、病人のそばで夜をすごすのが習慣である。つまり、病人への見舞の品物には生のタロイモやパンノキの実が使用されない。これは、病人が「食べたい」ものをすぐに食べられるようにとの、見舞人の気持の表現であると説明されている。

病人見舞で消費される食料を援助するため、酋長は島の男たちに、若いココヤシと成熟したココヤシを一回ずつ違う日に提供するように指示する。それらの個数は男一人あたり四個である。この贈りものは、エマーム（「見舞の品物」とよばれる。それにたいし、病人のリニージではパユンナ・リキリキ



- 註1 死者は、1979年10月に82歳で死亡。  
 註2 使用された腰布の総数は99枚。  
 死者のリネージでは、36枚を用意した。

図18 埋葬儀礼の腰布の贈与

〔見舞のお礼〕として、タロイモ料理などの食べものをお返しにする。現在ではそれが紙巻きタバコになつており、その数量は一人あたり五本程度である。お返し品の集積には、アフアクルたちが貢献する。

死と埋葬

死者の出したことを知ると、女たちは手に新しい腰布を持って弔問に集まる。この腰布は死体を包むもので、アックック（死体をくるむ）とよばれる。親族関係者からは十枚以上の腰布が贈られるが、非親族関係者のリネージからも数枚ずつ届けられる（図18参照）。死体は百枚ほどの腰布に包まれてから棺に納められる。

埋葬には、島の人びと全員が参加する。埋葬が終わると、死者を出したリネージから参列者全員に、食べものないしタバコが贈られる。現在では、墓場でタバコが成人男女に均等に配られる。その総数量は、二十本入りの紙巻きタバコが三百個見当で、それらの値段は三百ドルに相当する。埋葬後に行われる贈与は、病氣見舞にたいするお返しと同様、パユンナ・リキリキとよばれる。タバコの大部分は病人を看病した親族関係者から提供される。そのなかでも、病人のリネージのアフアクルがそ

の半数以上を調達することが期待される。かつては、タロイモ料理がお礼として島の人びと全員に配られていた。それに消費されるタロイモの数量は莫大なもので、病人見舞の人びとに支給する量も合わせると、死者を出したりニージが保有するイモ田のタロイモの総量の三分の一ほどが掘り起こされたといわれる。埋葬のときに、島の人びとにタバコないし食べものが贈られるのは、棺づくりや穴掘りなどの男性の仕事にたいするお礼であり、腰布を贈与してくれた女性へのお返しを意味している。

#### 弔いあげ

埋葬後四日間、死者のリニージでは食事をつくることがタブーとなる。それで、埋葬の翌日、島の男たちは若いココヤシを一人十個ずつ採取してカヌー小屋に集まる。そのなかから、四十人分のヤシを、島の女たちに均等に分配するために残す。あとのヤシはすべて死者のリニージに贈られる。この贈与はファイ・ムアーン（「男の手」）とよばれる。その翌日、こんどは、女たちがタロイモ田に出てイモを掘り、食べものを料理して一人一皿ずつ死者の出た家へ持参する。これは、ファイ・ロープット（「女の手」）である。この食べものは、リニージの女性族長が島の各リニージに分配し、残ったものを自分たちのものにする。

五日目の早朝に行われるフィラオラオがすむと、死者の出たりニージの族長は、特定のヤシ木の周囲のヤシの木にヤシの葉を結ぶ。それはパイ・ヌ（「ヤシの木の禁忌」）とよばれ、管理者以外のものがそのヤシ林へ立ち入りことを禁止する標示である。この対象となるヤシ林は、死者を出した家の成員が保有するヤシ木のなかで広い面積があり、手入れのゆきとどいている土地である。この土地を管理する人



吊いあげの日、ココヤシを分配する

びと（死者の息子や娘の夫）は、ここに入って下刈りをしたり、落ちたココヤシを一箇所に集積することを許されるが、その実をとり出して消費することを禁じられる。禁忌の期間は五〜六ヶ月も続き、ココヤシが相当蓄積されたときに解除される<sup>6)</sup>。

この禁忌について、人びとは二つの理由をあげている。一つは、死者にたいする「淋しい気持」の表現であり、もう一つは、葬送儀礼で消費したココヤシを「もとにもどすため」という。前者の理由は、死者の霊を吊うことを目的としていることがあきらかである。後者の説明は葬送の儀礼で「浪費」した食料資源を回復するため、資源の乏しい島社会において経済的には合理的な手段といえよう。いずれにせよ、埋葬後の一連の贈与・交換において注目されるのは、男性のからのココヤシと女性からのの食べものが、死者を出したりニージに集積されたあと、島の人びとに再分配される点である。とくに、埋葬の翌日、男たちが集めたココヤシの一部を島の女たちに優先的に分配する慣行は、葬送儀礼で彼女たちのはたす役割の重要性を表わしていると解釈できる。

#### 酋長クラン成員の死

サタワル社会には、島全体の酋長を輩出するクランが三つある。それらの成員が死んだ場合、埋葬後数ヶ月を経てから大量のタロ

イモを集積し、分配する儀礼が行われる。これはファリックとよばれ、酋長の指示のもとに実施される。酋長は死者の出た時期を考え、儀礼を行うときを人びとに知らせる。ふつう、パンノキの実が豊富な七月八月ころである。この儀礼にはタロイモが使用されるので、女たちはイモづくりに励む。

ファリックの朝、女たちはこの日のために育ててきた一枚の田にあるタロイモをすべて掘り起こして、儀礼場となるカヌー小屋に運ぶ。一人あたり五〜六籠にもなる。リニージ間でどれだけタロイモを提携できるかを競いあう。カヌー小屋の前に積みあげられたタロイモは、酋長の指示のもとに男たちによって分配される。老若男女を問わず島の人びと全員に均等配分され、その数は一人あたり二十〜三十個になる。タロイモはすべて分配されず、一部は残しておき、分配後カヌー小屋に集まった人びとに投げ撒かれる。このように、一定期間貯えたタロイモを一度に分配、消費する儀礼は一九五一年の葬送儀礼を最後に、キリスト教の神父によって禁止された。食糧を無駄にするという理由からである。ファリックの語意はあきらかでないが、その目的は死者を出したリニージ成員の「淋しい気持」をなぐさめるためと説明される。この儀礼が行われるのは、酋長リニージから死者が出たときに限られることから、ファリックは社会的に優位な地位にあるものの死を、島全体で弔うことにあるともいえよう。

### 贈与・交換の意味

サタワル社会の人生儀礼において贈与の対象となるものは、魚、タロイモ、ココヤシの実、パンノキの実、腰布、装飾品とタバコである。集団間での贈与対象物は料理された食べもの、肉類、土地と樹木

表8 贈与・交換における男性財と女性財

財	男性財	女性財
カテゴリー		
食べもの (モゴ)	魚 ココヤシの実 パンノキの実	タロイモ
品物 (ピシャク)	タバコ 装飾品	腰布
土地 (ファヌ)	ココヤシ林 パンノキのある土地 (ブノク)	タロイモ田 (ポーン)

註) 貝製首飾りやべっ甲製腰布帯などの装飾品は女性の使用物であるが、男性によって製作ないし入手されるので、男性財のカテゴリーに含む。

である。人びとはそれらの贈与財を、モゴ(食べもの)、ピシャク(品物)、ファヌ(土地)の三つに分類している。モゴのカテゴリーには、魚、タロイモ、ココヤシとパンノキの実がふくまれる。ピシャクには、腰布、装飾品、タバコ、そしてファヌには、タロイモ田、ココヤシ林やパンノキのある土地がそれぞれ該当する。

三つのカテゴリーの贈与財は、男性によって採取、獲得ないし管理されるものと、女性によって生産、製作ないし管理されるものがある。男性のものとみなされるのは、魚、ココヤシ、パンノキの実や樹木のある土地、装飾品、タバコである。女性ものは、タロイモおよびタロイモ田、料理されたもの、腰

布である。それらの生産、獲得、および管理の主体が性によって類別されているので、ここでは前者を男性財、後者を女性財とよぶことにする(表8参照)。この男性財と女性財との対立は、基本的には労働の分業と関連している。つまり、男性と女性との性的分業にもとづいてつくりだされた産物が、交換財としての意味をもつのである。

### 分業と交換財

男性財と女性財との対立が、食物、品物、土地の三カテゴリーの領域において、どのような象徴的意味を表わしている

のかという点を中心に、サタワル社会の贈与・交換の性質をあきらかにしてみたい。まず、食物のカテゴリに分類される魚、ココヤシとパンノキの実、タロイモをとりあげることにしよう。漁労活動、ココヤシとパンノキの手入れおよびそれらの実の採取は、男性の責任、タロイモの栽培、収穫は女性の仕事と、決められている。それらの生業（生産）にかかわる分業は、男女の肉体的差異という要因だけでなく、伝統的宗教観念にもとづいている。つまり、男女それぞれの仕事には多くの禁忌がともなっているのである。その禁忌事項を遵守しない場合には、超自然的存在によって危害がおよぼされると信じられている。

タロイモの栽培は女性の仕事とみなされ、男性には禁忌である。それにたいし、礁湖外での漁労は男性の活動で、女性にはきつく禁じられている。その理由は、タロイモの豊穣をつかさどるイナトウ・ボン（イモ田の神）が海の臭い、とくに魚の臭いのする存在（男性）を忌み嫌うからだといわれる。たとえ女性であっても、タロイモ田へ行く前に夫などの漁具に触れたり、魚の骨を踏んだだけでも、浄めの儀礼を終えたあとでないとイモ田へ入ることができない。そのため、女性は早朝に田へ行くとき家の内外で女の空間を通らなければならぬ。万一、男性がタロイモ田へ入ったり、女性がそれらの禁忌を犯した場合には、田の神が怒ってタロイモを枯れてしまうと人びとは考えている。

逆に、特定の海域で漁をする日の前夜、男性は妻や恋人と寝てはならず、カヌー小屋で泊らなければならない。そのうえ、出漁前および漁労活動中に、女性の料理したタロイモやパンノキの実を口にしてはならない。この禁忌は、アニヌヌワイ（海の神）が女性の血や性器の臭い、女性によって料理された食べものの臭いを忌み嫌うからだとして説明される。もし、そのような禁止事項を守らない場合には、海の

神が魚をかくし、一匹の魚もとれないようにするといわれる。不漁が続くときには、それらの禁を破つた人を探し、忌みおとしの儀礼を行う。

タロイモの栽培（女性）と漁労活動（男性）との対立、つまり海と島での生業活動の対立は島のなかでの労働においても顕著である。それはタロイモ田とココヤシ林やパンノキの管理における男性と女性の対立である。ココヤシやパンノキに登りその実を採取することは女性の禁忌事項になっている。腰布を身につけた女性が男性より空間的に高いところに位置することを、ソートップ（祖霊）が許さないからだという。この禁忌は異性間、とくに異性のキョウダイ間では女性が頭を男性より低くするという忌避行動に関連している（7章参照）。それを犯した場合には、祖霊が懲罰としてリニージ成員に病気や死などの危害をくわえると信じられている。このように、島内の資源利用に関しても宗教的観念と結びついた、タロイモ田・湿地―女性、ココヤシ・パンノキ・乾燥地―男性という対立が顕著である。

### 男性財と女性財

海と島、島内での乾燥地と湿地における生業活動の男性と女性との対立は、それらからの生産物の贈与・交換においても、男性財と女性財との対立という形で反映される。たとえば、人生儀礼での誕生儀礼や航海術修得儀礼にみられる、魚―男性とタロイモ―女性、葬送儀礼でのココヤシ―男性とタロイモ―女性といった例をあげることができる。誕生儀礼では、男のとった魚が女に、当該リニージの女からのタロイモ料理が男に、それぞれ贈られる。また、葬送儀礼においても、男のココヤシが女に、女から



魚の分配

のタロイモ料理が死者のリニージの女によって島の人びとに分配される。このような人生儀礼の贈与・交換で注目されるのは、まず島のすべての男女が関与し、男性財と女性財とがかならずセツトとして登場することである。そして、男性財と女性財は当事者への贈与という形態をとるが、島レベルでみるなら終局的には、分配の過程をへて男女間で交換されることになる。

つぎに、人生儀礼の過程で顕在化する男性財と女性財との組み合わせ、およびそれらの男女間での交換の意味について考察してみよう。サタワル社会では、男が特定の海域に出漁して多くの魚をとってきたときに、女からの料理が届かなかったり、その量が十分でなかったりすると、男たちは女の不手際を責める。逆に不漁が続く島の女に魚がまわらない場合には、女たちは男たちの腕の悪さを歌にして揶揄する。とくに、儀礼や祭宴のために禁漁区

が解放された場合、男の漁獲量の多寡が問題になる。

獲物と生産物とをめぐることのような男女間での評価は、日常生活においてもみられる。夫が魚やココヤシをとってこない日が続くと、妻は夫のために食べものをつくらないことで対抗する。夫が魚とりやココヤシの手入れをしないことは、「怠け者」とみなされる。それにたいし、妻が食事の用意をしないということは、夫の行為への非難の表現である。逆に、妻がタロイモ田の耕作や料理づくりを怠ると、

夫や子どもに「よその畑の食べものを採させる」ことを意味し、「恥かしい」行為とみなされる。夫婦間でのそれらの生産活動への拒否は、離婚への示威行動を意味する。

サタワル社会における男女間の生業活動へのかかわりあい、およびその考えかたをみれば、男性財と女性財は男性と女性の存在そのものを象徴していることがうかがえる。つまり、島レベルから家族レベルにいたるまで、男性と女性とがそれぞれの生産物と獲得物を交換することによって社会生活を維持しているのである。生業活動における男女の活動は、宗教的観念と結びついて、男性が漁労およびココヤシ、パンノキの栽培、女性がタロイモ耕作と規定されている。この男女の分業にかかわる禁忌は、機能的には男女がそれぞれの分野でより多くの獲物と収穫物を獲得するのに役立っている。このことは、男女間の交換の局面で、「競いあい」の様相が顕著にみられることからあきらかである。したがって、サタワル社会における男性財と女性財との交換は、交換対象物の生産性を高めることが意図されているとみなせよう。

### 贈与財としての腰布

腰布が人生儀礼で贈与される機会は、初潮儀礼、航海術修得儀礼と葬送儀礼である。初潮儀礼のさいには、「一人前の女」を象徴するものとして、また葬送儀礼のときには、死者を「包む」ものとして使用される。航海術修得儀礼では、師匠への「献納物」として使われる。そこでの腰布は、師匠からの知識の伝授および資格の授与にたいする謝礼として贈与される。これは、男が女の織った腰布によって

「一人前の航海者」になれることを意味している。つまり島の男として基本的条件である航海術の修得に、男性財でなく、女性財の腰布が不可欠な贈与財として役立っているのである。

腰布は、他島との交易、交換活動においても重要である。航海者は、「腰布さえ手にしていれば、どんなものでも得ることができると言う。たとえば、島で栽培できないウコンの粉末、貝製首飾り、鼈甲製腰帯などは、腰布との交換によって入手可能になる。航海者（男）が他島へ航海してどれほど多くのピシヤックを持ち帰るかは、彼のリニージだけでなく島のすべての女たちの関心のまゝである。このように、腰布は社会や集団の必需品を島外から獲得するための貴重な「財」となっている。そして、交易においては、女性が交換の対象物を製作し、男性が交換活動に従事するという男女間での役割の分担が明確になる。死者を包むものとしての腰布の意味について、人びとはつぎのように述べている。腰布でくるまれない死にかたは「不名誉」なこと、その霊は人びとに危害をあたえるアマウ（祖霊）になる。たとえば、カヌーでの漂流死などの場合である。つまり、集団の人びとを庇護する祖霊になるには、腰布で包まれて弔われることが基本的条件とみなされているのである。

以上のことから、人生儀礼での腰布の贈与は、一つには男女とも子どもの段階から大人のそれ（一人前の女と航海者）への通過期、二つには生者から死者（祖霊）への移行期に行われていることがあきらかになった。初潮儀礼は女性が一人前の女として生産活動と出産の役割を担うことを意味しており、航海術修得儀礼は、男性が航海者として島外から物資を入手する責任を負うことを表わしている。そして、葬送儀礼においては、死者が祖霊となって人びとを守護することの願いがこめられている。それらの性格を考慮にいれると、人生儀礼における腰布の贈与の象徴的意味は、初潮儀礼では女性の豊穣性と多産

性とに、航海術修得儀礼では男性の外世界からの富の獲得にあるとすることができる。また、葬送儀礼でのそれは、人びとにたいする祖霊の恵みのほどこしにあることを指摘できる。

### 土地の贈与

土地の贈与は1章と6章でふれたように、姻族関係にある母系出自集団間、つまり母系リニージ間で行われる。男性財（ココヤシやパンノキのある土地）と女性財（タロイモ田）とが一組になっている。それらの土地は、ある集団からその集団の男性成員が婚出した集団へと贈与される。前述したように、二集団間での土地の贈与とそれにたいする返済の性格は互酬的である。つまり、土地を贈与された集団の子どもたちは、土地を贈与した彼らの父の集団にたいし、生涯にわたって物資と労力によるお返し（義務を負うからである。このことは、母系社会において、父の集団とその子の集団（二つのリニージ）の結びつきが、島でもっとも重要な資源である土地を媒介にして保たれていることを示している。贈与された土地の存在こそが、婚姻を契機に結ばれた二集団間の紐帯を確認し、維持・強化する象徴として機能していることになる。

サタワル社会の人生儀礼での贈与・交換は食料資源の利用における規制と解放と関連している点をあげることができる。大量の資源の蓄積と消費（再分配）は、島の政治的指導者（酋長）の指示によって実施されるからである。つまり、食料資源が限定され、余剰生産物を期待できない島社会においては、贈与・交換の基本的性質が飽食と節食という対照的局面を人為的につくりだすことによって、社会的統

合をもたらしることにあるという解釈がなりたつ。